王の剣士番外四

# 「黒森ヴィジャと雪呼ぶ獣～と温泉紀行～」

雅

# 一

「さぁーむぅーいぃいー！！！」
声を限りに叫んだところで、叩きつけてくる吹雪が止んでくれる訳ではない。
むしろ激しくなった気がした。
「レオアリスー！　どーこぉー！？」
声を限りに叫んでも、返事が返る気配もない。声は白い雪の幕に簡単に吸い込まれ、余韻すら残らなかった。
荒れ狂う雪の粒。ひらひらと舞い降りて来る時は美しく柔らかに思える雪も、この勢いで顔に当たると一粒一粒が尖って肌を刺すように痛い。
深い森は風雪を少なからず遮ってくれるものの、それすら意味なく感じてしまう強い風が吹き荒れている。
アスタロトは身を縮め、傍らのアーシアを抱き締めた。というより抱き付いた。アーシアはひやりと冷たい。
「寒い～！　アーシア肌冷たい～！」
「すみません、僕が変温動物で……」
この寒さに合わせてアーシアも体温が下がっている。飛竜だから。外気温に応じた体温を保つ種を変温動物と……
「アーシアが気にする必要ないぞっ」
雄雄しく告げつつも、アスタロトは激しく迷っていた。
人生に、とかではなく、道に。
この一間先も見えないような真っ白な雪の世界で。
頬に感じるアーシアの肌の冷たさに、アスタロトは吹雪く白い世界を精一杯の恨みを込めて睨み付けた。
「こんな雪なんて、私があっという間に溶かしてやるんだから！」
そう叫ぶと、手のひらに作り上げた火種に向かって、アスタロトはふうっと息を吹き掛けた。
火種は膨れ上がり、轟く激しい炎の奔流となり、吹雪の幕を穿つ。
けれどそれも一瞬の事で、吹雪はあっという間に穿たれた穴を埋め尽くし、アスタロトを嘲笑うかのように吹き荒れた。
この北の辺境に果てなく横たわる黒森――ヴィジャは、不用意な侵入者を無慈悲に拒む。
いや――拒みもせず、ただちっぽけな小石のように、意識の端にも引っ掛けないのかもしれない。
炎帝公と言われ、全てを焼き尽くす炎を有すると評されながら、自分は何と無力なのだろうとアスタロトは呻いた。
炎など、この自然の猛威の前に何の役に立つのか。
「死ぬ……凍える……」
手足は氷で造られたかの如く冷たい。髪は凍り付いてずしりと重く、口元を覆う布から漏れる息はその場で凍るようだ。
気力で耐えていたものの、この骨を震わせる寒さも真っ白い世界に立つ孤独感も、そろそろ限界に近付いていた。
「死ぬ……」
アスタロトが雪の上に膝を付き、アーシアはその肩を両腕で覆った。
「アスタロト様、しっかり……！」
「――どこ？」
アスタロトの唇が儚（はかな）く震える。
「……温泉どこぉー！？」

## 二

「ねぇ、お前温泉入った事ある？」
と、アスタロトが言い出したのは、新年に入り二十日ほど経ったある寒い日の午後だった。
いつものようにアスタロトが近衛師団に遊びに来て、レオアリスと執務室の来客用の卓を挟んで座り、何となく会話を交しつつのんびりしていた。
執務机に座っていたグランスレイとロットバルトが一度確認するように視線を上げて、また書類に戻す。レオアリスは書類を置き、アスタロトが手にしている雑誌の表紙を卓の向こうから見つめた。
雑誌といっても化粧の仕方やらファッションやら恋愛占いやらが載っている訳ではなく、主に政治的な話題や王都や国内の目新しい物事を取り上げる、ちょっとお堅いものだ。年に四回、王立文書宮が発行している、木版多色刷りの豪華版だった。
ちなみにこの世界、ファッション誌といった余暇娯楽的精神溢れるものは存在しない、念のため。
「温泉――？　あるけど、何で？」
アスタロトが瞳を煌めかせる。
「温泉行きたい！」
「……そうか。行ってらっしゃい」
レオアリスはなるべく意に介さないように努め、それまで読んでいた資料に再び眼を落としかけ――、何かを察知して飛び退いた。それまで座っていた長椅子が燃え上がる。
「ああっ、てめェなぁ！　気に入ってんだぞこの椅子！　昼寝にちょうど良くて……」
「良かったじゃないか。昼寝（サボリ）の要因が消えてお前の部下は感謝してくれる」
「――」
アスタロトの顔はにこりともせず真剣そのものだ。レオアリスはグランスレイ達の顔を見回し、そこに浮かんでいる表情と、まだ諦め切れずに炭化した長椅子とを眺め、肩と一緒に溜息を落とした。
アスタロトはしばらくレオアリスを見つめて反論が無いのを確認した後、見た目だけは愛らしく微笑んだ。
「温泉行きたい。黒森って温泉あるんでしょ？　私まだ一度も入った事無いんだよね。露天風呂とかあるんでしょ？　空が見えてすごく気持ちいいんだって昔、母様が話してくれたの覚えてるんだー」
「ったく、そんなに温泉に入りたきゃ、適当に石でも熱してお前ん家の池に放り込んでおけよ。すぐに露天風呂……」
今度は命の危険を感じた。
アスタロトが薄らと、紅い陽炎を纏っている。取り敢えず口を閉ざし、レオアリスはアスタロトの様子を伺った。
腕を組み、アスタロトはレオアリスを睨んでいる。
「……こないだ、何でも言う事聞くって言ったよねぇ」
「――言った、っけ？」
「言った！」
「言いました」
こくりと頷く。
「じゃあ温泉行こう。明日は？」
（――無茶苦茶な……）
レオアリスはもう一度、グランスレイとロットバルトの顔を眺めた。二人ともまだ口を挟む気は無いようだ。取り敢えず自分で反論を試みる。
「約束はした。したけどなぁ、だからって何でいきなり温泉なんだ。あんなの森ん中の池が暖かくなってるぐらいで、他には何にも無いぜ」
情緒の欠片も無い言い方だが、仕方が無い。確かに黒森（ヴィジャ）の中には所々温泉が湧いていて傷を癒すなどと言われていたが、レオアリスが今口に

した通り、そこは他には何も無い場所だった。
というより時折命の危険を感じる代物というか。
周りは雪と森しか無く、おまけに。
「ヴィジャの獣が色々入りに来るしなぁ……」
「何ぶつぶつ言ってんの？　それよりこれだよこれ！　温泉特集！」
うきうきと瞳を輝かせながらアスタロトの差し出したのは、先ほどの雑誌だ。
「温泉特集……？」
そんなノリノリの記事を載せる内容だっただろうか。仮にも王立文書宮編纂である。
レオアリスは首を傾げ、開いた頁を覗き込んだ。そこにある見出しを眼で追う。
『～心を癒す隠れ家的温泉宿～　初公開、シュランの秘湯』
文責、王立文書宮長スランザール
（……。スランザール……）
ああ、浸かりそう……とほんわり思った。気持ちよさそうに湯に浸かっているスランザールの姿が容易に思い浮かぶ。手ぬぐいを頭に乗せたり……
「食事が豪華なんだって～、ここ」
「食事？　何で食事？」
何の話かともう一度良く確認すると、表題にもしっかり宿と書かれている。
「宿？　ヴィジャに？」
レオアリスは少しばかり驚きを覚えた。
シュランは知っている。故郷の村から歩いて三日ほどの黒森の縁あたりにある村だが、故郷と同じくらい寂れた村で、故郷にいた四年前には何もない場所だった。
（確かに温泉はあったけど）
「いつの間にこんなになったんだ？」
それに答えたのはロットバルトだ。
「観光資源としての温泉の価値が見直されたのは三年ほど前ですね。北方公の辺境部振興施策として二年前から整備が進められていて、今年になって本格化するようです」
「温泉が振興になるのか」
「なりますよ。そもそも財政支援や不定期の義援金だけでは根本的解決にはならず限界がある。地域そのものの生産性の向上や自主財源確保は重要な課題です」
「ああ、確かに」
「スランザール公のその記事は新規事業の周知が目的でしょう。似合ってますが」
さすがは国内最高峰学府王立学術院三年連続首席記録保持者、知識が広範囲に渡っている。
が、こんな処で懇切丁寧に説明する位なら、アスタロトが椅子を焼いた時点で適切な口出しをして欲しかった。
しかしロットバルトはそれだけ注釈を入れると、後はまた書類に戻ってしまった。
「――まあ」
何はともあれ、辺境へのそうした施策が進められているというのは興味深くもある。
「振興策か」
「固い話はいいけど、ベールがやってるなら宿押さえてもらえるな」
「マジで行くのかよ……仕事はどうするんだ。ヴィジャまで飛竜でだって一日近く掛かるぜ」
「行くよ！　二泊三日（機中一泊）の弾丸ツアーだよ～」
「騎上だろ。大体明日だの明後日だの、お前はいっつも無計画過ぎるんだ」
むっとしてアスタロトはレオアリスを睨んだ。瞳には傷ついた色が浮かんでいる。

「――何だよっ、お前、いっつもいつも私がやりたい事否定ばっかしてっ。私と遊ぶの嫌なのか！　判った、私のコトなんか嫌いなんだ！」
「ガキじゃ」
あるまいし、と言おうとしてさすがに止めた。いくら気が置けない間柄だとは言え、軽口もこれ以上は言い過ぎだ。
既にもう、アスタロトは拗ねてしまっている。
「いいよ、もう、レオアリスなんか誘わないもん！　絶対誘ってやらないからね！　美味しいお店も面白い場所もアーシアと行くもん！　どうせ私の事キライなんだから」
「違うって」
「何が？！」
ぷい、と膨らませ頬を背けたアスタロトの腕を取り、レオアリスはもう一度向かい合った。
「嫌な訳ないだろ。アスタロトの事は好きだぜ」
「――す……」
一瞬、室内の音が消えた。
アスタロトがさっと押し黙り、それから見る見る頬に血を昇らせる。
頬が火照っているのが自分ですら判って、アスタロトはそれを隠すように両手を当てた。
「お前、そ、そういうコト」
「そういう意味じゃなくって」
「え……」
「俺が気にしてるのは今の時期、慣れない奴がヴィジャなんて無理だって事だよ。行くにしてもせめて春になってからにしようぜ」
アスタロトを落ち着かせようというように、レオアリスは穏やかに、にこりと笑ってみせた。
「絶対その方が楽しいって」
「――」
再びしん、と室内が静まり、空気が一度に冷え込んだ。
ロットバルトが片手を額に当て、軽く溜息をつく。
（ある意味、質が悪いな……）
レオアリスは自分の言った言葉の持つ側面を認識していない。周囲の予想通り、アスタロトは眉をキッと引き上げた。
「春なんか待ってられるかっ、ばぁーか！」
「バカ……？」
「今の時期だからこそだろ！　何の為の振興策だ！」
「だから振興する前に凍るっての」
「皆行きたがってるもんっ」
「皆って誰だよ」
「私と……」
アスタロトははっと気が付いた。
今まで彼女は無意識ながら、レオアリスと二人で行こうと誘っていた事になる。しかも泊まりで。そこらに食べに行くのとは訳が違う。
元々ちょっと破天荒とは言え良家の子女だ。再び、アスタロトは首筋まで真っ赤に染めた。
「だからほら、無理しないで春に」
「いや、行く！　ア、アーシアもいるしっ」
ちょうどその時がちゃりと扉が開き、演習場へ行っていたクライフとヴィルトール、フレイザーが戻って来た。クライフは執務室に一歩入ると暖炉で暖められた空気に触れ、ぶるりと身体を震わせた。
「うぉあー、寒かったー！　熱い風呂に浸かりてぇー！」
アスタロトがはいっと右手を上げる。
「温泉行くひとー！」
「行きまーす！」
にょっきり手を上げたクライフは、直後に書類の束で頭を叩かれた。
叩いたヴィルトールが涼しい顔で書類を手渡す。

「お前もさ、取り敢えずで乗ってみるのは止めたら？　話は良く聞いてから答えないと人生後悔するよ」
「取り敢えずで叩くな。第一その言い方はアスタロト様に失礼じゃねぇの？」
「まだまだだな」
　意味深な笑みを残し、ヴィルトールは自分の席に座った。
「何だまだまだって。後悔なんてしねぇっての、ねぇアスタロト様。で、アスタロト様、温泉て何の事です？」
　遊びの話は大歓迎と身を乗り出したクライフの目の前に、アスタロトはほっと息を吐いてあの雑誌を開いて差し出した。
「こここここ。この温泉宿に行くんだ。皆も行かない？」
「温泉宿！　いいっすねー、行きます！」またしても即決し、クライフは雑誌を覗き込んだ。「へぇ、黒森か。黒森ったら上将の出身地ですね。一度行ってみたいと思ってたんですよ。どんな感じですか、上将」
　賑やかなクライフに年下のレオアリスが苦笑を浮かべる。
「まあいい所だけど、真冬はマジで止めた方がいいと思うぜ。温泉がいくら温かくても出た瞬間凍って死ねる。周りは森ばっかだし、色々厄介な獣も多いし……シュランはこれまでは本当に人の行かない場所だったからな」
　レオアリスの言葉の内容にも関わらず、クライフは目を輝かせた。
「おおー、それってなんか秘湯ってヤツっすねー！」
「いや、」
「できたばっかりなんだって。じゃ、決定ね！　私ベールに言って部屋取ってもらうよ」
「おい、まだ行くって決まった訳じゃ、」
　アスタロトがすうっと瞳を細め、レオアリスは口を噤んだ。
「これ以上文句あるの？」
「――」
「はーい、じゃ決まり！　行くのは私とアーシアとレオアリスとクライフ？」
「――」
　ぽんぽんぽん、と名前が列挙され、ここにはいないアーシアを抜かした三人は顔を見合わせた。
　……何が原因とは言いがたい、微妙な空気が流れている。
　ロットバルトが流麗な笑みを刷き、その空気の原因を容赦無く言い表わした。
「また随分と、方向を外れて雪道を転がり落ちそうな顔触れが揃ったものですね」
「お前、またそういう事をさらっと……。じゃ一緒に来るか？　歓迎するぞ」
　レオアリスが自棄（やけ）ぎみに口の端を上げる。
「遠慮します。同行した場合の自分の役割が判り切っているのでね。アーシアも常識が有りそうで無いしな」
　ロットバルトの評価はかなりひどい。が、実際そうだ。基本的にアーシアはアスタロトが満足なら満足なのだ。
「まあまあ、道中は俺に任せてくださいよ！　なんつってもこの面子じゃ俺が一番年上ですからね～！」とクライフが言い、「私がいるから大丈夫！　心配すんなよ～！」とアスタロトが胸を張り、そんなお気楽な発言を聞いていると、余計不安が増してきてレオアリスは肩を落とした。
　冬の黒森がどんな場所か、彼等は判っていない。特にこの時期は。
　それまでただ状況を見守っていたグランスレイは、その場を区切るように溜息を吐いた。
「ロットバルト」
　執務室内に、緊張を孕（はら）んだ静寂が落ちる。
「――何か」
　グランスレイの意図を明確に理解した上で、ロットバルトは非常に爽

やかな笑みを返した。
　ものすごく、命令しづらい。
　自分のこなすべき量以上の仕事を全てこなして正に帰宅しようと席を立った部下に残業を命じる時の上司の心持ちのそれだ。
　上司の心が折れたら、次はどちらにお鉢が回ってくるだろうかとヴィルトールとフレイザーはお互いに牽制する視線を交わした。
　真冬の北の辺境、黒森、アスタロト、クライフ。
　暖炉の火で暖められているはずの室内の空気は、黒森を吹き荒ぶ北風だ。
　が、グランスレイの精神は鋼のように強かった。多分熱風でも曲がらない。
「休暇でなくても構わん。同行してくれるな？」
　一呼吸を置いて、ロットバルトは再び柔らかな笑みを刷いた。
「ご命令とあれば致し方ありませんね」
　固唾を飲んで見守っていたヴィルトール達が、ほぉっと安堵の息を洩らす。
「……失礼だろ……」
　一連のやり取りにレオアリスは肩を落としたが、アスタロトは気にならなかったようだ。
「そんじゃ、ロットバルトも入れて五名ね！　私今からベールんとこ行ってくるネ～」
「五人か、結構な人数だね」
「そうね――あ！」
　フレイザーは重大な事に気が付いた。
「待ってください、アスタロト様」
　飛び出しかけたアスタロトを慌てて止める。こればかりは黒森だの真冬だの、クライフだアスタロトだと言ってはいられない、最重要問題だ。
「アスタロト様、その、女の子一人じゃつまらないでしょう。私も同行しましょうか」
「ホント？！　やったぁ！　一緒に入ればいいやとか思ってたけど、フレイザーがいるなら良かったぁ」
「一緒――」
　びしり、と室内の空気に亀裂が走った。冷えたり荒れたりひび割れたりと、今日の執務室内は慌しい。
「も……もうぜひ、ご一緒致しますわ！」
　フレイザーは引き攣った微笑みを浮かべ、アスタロトの手を握りしめた。
「じゃ、後で予定連絡するね～」
　そう言って片手を上げ、一人アスタロトは明るく、執務室を出ていった。
　室内は再び何とも言い難い空気に満たされたが、さすがにロットバルトでさえその原因に触れようとはしない。行く手には波乱しか見えない気がする。
「――まあ、今日の明日で部屋が空いてるとも限らないしな」
　そもそも普通この時期なら閉鎖してもおかしくはない。ベールが断ってくれる事に期待して、レオアリスはもう一度あの雑誌を眺めた。
　ふと気が付いてそれを取り上げる。
「――何だ、春の営業開始じゃねえか」
「あら、そうなんですか？」
「そりゃそうだよな、今の時期ヴィジャなんて訓練ぐらいにしかならないし」
「じゃあ今回は無しというか、延期ですね」
　漸く今日一番、室内の空気がほぐれ、クライフ以外は全員安堵の笑みを浮かべた。

## 三

「ああ、構わない。今は試行期間でね、春先の本格稼働の前に色々意見が欲しい処だ。部屋を用意しておこう」
レオアリス達の期待も空しく、ベールはあっさりと快諾し、温泉行きは決定した。
「やったぁ！　ありがとぉー！」
ぴょんぴょんと飛び跳ねて喜ぶ少女らしい姿は無邪気で微笑ましい。同じ四大公爵の一員として、また、まだ幼いアスタロトの事をベールは妹のようにも見ている。
はしゃぐ様子にくすりと笑い、ベールは座っていた執務机の引き出しから、書類を取出しながら尋ねた。
「それで、誰が行くんだ？　レオアリスと」
途端にアスタロトが顔を赤くして、牽制するようにベールを睨む。
「何でレオアリスが出てくるの」
「レオアリス以外、アーシア位しかお前と行こうとはしないだろう。違うのか？」
「ち、違わないけど……レオアリスだけじゃないよ！　二人っきりとかじゃないからね！　アーシアとロットバルトとクライフと、フレイザーも」
「ほぉ……」
ベールがにやりと含みのある笑みを浮かべる。何が原因かは知らないが、アスタロトの反応がこれまでと少し変わっているのに気付いたからだ。
「いい進歩だ」
「何っ」
「いいや？　これまで全く面白みがなかったからな、お前等は」
「何ソレ」
首を傾げたアスタロトの顔を眺め、立っているのはまだほんの入り口も入り口かと、ベールは内心で苦笑した。余りからかうと逆効果になりかねない。
しかも、本気で後押しするには問題がある。大きな――。
「……何考えてるの？」
そろりと聞いたアスタロトに対して、ベールはいつもの口調で答えた。
「別に大した事じゃあない」
「そお」
アスタロトは疑わしそうな眼を向けているが、まだその問題を真剣に取り沙汰す段階でもない。
いずれそこに行き当たるとしても。
「まあ付き合わされる師団にも同情するが――とりあえず、その面子（めんっ）ならちょうどいい」
そう言うとベールは先ほど取り出したスランザールの現地調査報告資料を広げた。誌面に載せたのはその抜粋で、スランザールの報告書にはまだ続きがある。
「実は今、ちょっとした問題が生じていてな。ちょうど誰かを向けようと思っていたが、お前達なら充分すぎる位だろう。私としても有り難いよ。行く前に少し説明をしておこうか」
と付け加えたが、ふと顔を上げればもうアスタロトの姿は無かった。扉は閉まったばかりのようで、おそらくアスタロトはほとんど聞いていなかっただろう。
からかったせいで逃げ出してしまったらしい。
「……耐性の無い奴だ」
ベールは鋭く理知的な瞳をあっさりと扉から戻した。
「まあいいか。あの顔触れだ、死にはしないだろう」
国の中枢で物事を動かす者として、余り細かい事に拘っては立ち行かないものだ。
スランザールの報告書の最後の一枚を捲り、そこに綴られた文字にも

う一度だけ目を通した。
『……吹雪が激しくなり、安否の確認の為に我等はシュランの村に引き返した。だが』
ベールの視線が文字を追う。
「……辿り着けず――」
書類は少しばかり厄介そうな溜息と共に、再び机の引き出しにしまわれた。

そして三日後、めでたくレオアリス達は北の辺境へと旅立つ事になった。
（眠ィ……）
ハヤテの手綱を取り付けながら、レオアリスは欠伸を噛み殺した。辺りはまだ太陽の気配すらなくとっぷりと暗い。
北の辺境までは、一般的な緑鱗の飛竜で飛んでも一日の行程になる。現在は朝というよりは夜更けの三刻――だが、ハヤテだけではなく近衛師団の黒鱗やアーシアの翼、そして今の時期を考えると、着くのはどんなに早くても夕方過ぎになるだろう。
（しょうがねぇ、もう）
この時間でないと食事の時間に間に合うように向こうに着けないし、あまり文句を付けるとアスタロトが怒るから。
（マジで騎上泊にならなかっただけマシか）
「何だー、元気ないなぁ」
アスタロトはポンポンとレオアリスの肩を叩き、それから同行者を振り返った。
「準備終わった？　行くよー！」
「行けまーす！」
クライフが片手を上げて答える。ロットバルトは内心はどうあれ、常に準備の手際はいい。フレイザーはしっかりと防寒をし、首まで暖かそうな布で覆っている。
「アスタロト様も、防寒をきちんとしなくちゃ」
フレイザーはアスタロトに近寄り、鮮やかな赤と橙色の毛糸で織った布を彼女の首に巻き付けた。アスタロトが嬉しそうに布に頬を寄せる。
「あったかいや――ありがとう。レオアリスは準備できた？」
レオアリスも手を上げた。
「ハイハイ」
「気合いが入ってなーい！　シャキッとしてよね！　シャキッと！　これから長時間飛ぶんだぞ」
「終わってるよ」
普段は午前中からなど滅多に動かないアスタロトが、やけに元気だ。まあそれ自体はいい事だ。
「凍らない程度に楽しんで来てください」
ヴィルトールが笑い、ついでとばかりクライフにからかうような視線を向けた。
「酔っ払い過ぎて宿に迷惑かけないようにね」
「んな事しねぇっつーの」
「――ご無事で」
一番最後にグランスレイが重々しく告げ、レオアリスの不安を残したまま、珍道中が出発した。

ちょうどその夕方の事だ。出発からほぼ十五刻が経過し、レオアリス達はあと一刻ほどで辺境に着く頃と思われた。
王都の空は一日中雲ひとつ無く晴れていたが、北の辺境の空模様がどうなのか、ヴィルトールは時折空を見上げては気にしていた。
「ヴィルトール」
グランスレイは手にしていた封書を机に開き、しばらくその文面を注

視した後ヴィルトールを呼んだ。唸るようなその声に、ヴィルトールは窓際を離れてグランスレイへ近付いた。グランスレイが書状を差し出す。
「ベール大公からの書簡だ」
「大公？　珍しいですね、緊急の案件ですか？」
内政官房の長官であるベールから近衛師団に書簡が来るなど、滅多に無い。当然驚いた様子のヴィルトールの問いに、グランスレイは非常に複雑な顔を返した。
「どうかしましたか、問題でも？」
心配そうに眉を寄せたヴィルトールへ、グランスレイが書簡を差し出す。
書簡の文字はさすが流麗だった。内容はともかく。
その内容が一番の問題だ。
どんな時でも大体のんびり構えているヴィルトールも、さすがに目を丸くした。
「これは……」

知らせが遅くなって済まなかったが、と前置きし、ベールはある事件について書いていた。
例の温泉地で問題が発生している。一度調査団を送ったが、天候が荒れて引き返さざるを得なかった。以来何かと煩雑でまだ対応が取れていない。
レオアリスとアスタロトには悪いが、状況次第では対応して欲しい――、と。
「――状況次第ではって言っても、上将達が引き返せないのを見計らったような頃合いですが。まぁ大公らしいですね」
ヴィルトールが苦笑を洩らす。グランスレイは難しい顔で腕を組んだ。
「どうしたものかな。一班程度派遣するか」
「うーん、あまり人数だけ増やしても、却って黒森での遭難が怖いですしね。そもそも問題はそこだし……。とりあえず、伝令使を向けて状況を伝えるのはどうですか？　上将もロットバルト達もいるから、現地の様子と併せて判断するでしょう」
まだ少し緩い対応なのは、王都と黒森とのあまりの温度差と、遠く離れた地で今まさに何が起こっているのか、彼等に知る術が無かったからだった。
ベールの書状は意図せず、状況の核心を言い当てていた。
「けど、ちょっとばかりこれは怪奇ですね」

スランザールの文書は、こう警告している。
『宿を出て黒森を歩く事半日、滅多には踏み入る事のない黒森を満喫できたが、昼過ぎに雪が降り始め、吹雪き始めた。まだ冬の入り口だというのに、真冬のような雪だ。黒森の変化は著しく、あっという間に樹々が雪を纏い白い彫像を作り出した』
『次第に吹雪が激しくなり、安否の確認の為に我等はシュランの村に引き返した。だが辿り着く事はできなかった』
『村があるとおぼしき場所を探すも、目に映るのは延々と続く黒森の樹々だけ。村は忽然と消えてしまったかのように影もなく、後は遠吠えのみ』
『この遠吠えは昨夜も聞いた。高く空気を引き裂くような――獣の咆哮のようだ。遠吠えが次第に近付いて来た為、村を探すのは断念し、ひとまず王都へ戻る事とした。しかしこの咆哮が気にかかる。吹雪が治まったら装備を整え、改めて村とその周辺の安全を確認すべきと考える』

## 四

辺境に近付くに従って寒さは増し、飛竜の翼が切り裂く風にも少しずつ雪の粒が混じり始めた。見渡す地上は所々白い雪に覆われている。

「寒い……」

アスタロトがぼそりと呟く。高い位置で結わえた長い黒髪が向い風に吹き散らされて、一層寒そうに見える。

「そりゃそうだ。これから北に行く毎にどんどん寒くなるぜ。飛竜の速度なら余計だし、向こうの空模様だとその内吹雪くだろうな」

「ぇえ〜」

「引き返すか？」

ここでうんと言っておけば――その後の苦労は無かった。

「やだ」

しかしアスタロトは断固として首を振った。

既に行程の八割は過ぎていて、せっかくここまで来たのに今さら帰るのなんてもったいない。この場所からではもう王都よりも黒森の方が近いのだ。

「いいの。温泉に浸かったらぽっかぽかになるよ。こんな雪、温泉に浸かって眺めたら食後のおやつみたいなモノだよ。ああ楽しみ〜」

ちょっと自棄気味な口調ながら、夢見るような仕草で両手を合わせている姿からは、今日の旅行を心の底から楽しみにしていた様子が伺える。

ただ、それで寒さが消える訳でもないが。

「ふぁっくしっ」

盛大にくしゃみをして、アスタロトは細い身体を震わせた。

「寒ぅい！　毛皮持ってくれば良かったぁ」

「だから言っただろ、しょうがねぇな……ほら、これ着てろよ」

レオアリスは自分の着ていた外套を脱ぎ、アスタロトに差し出した。

「いいの？　お前が寒いんじゃ」

「いいよ。俺は慣れてるから」

少し迷っていたが再び強い風が吹き付けて、アスタロトはアーシアの背から手を伸ばして外套を受け取った。

袖を通すとまだ残る温もりがふわりと伝わり、自然と息が零れる。

「……あったかい」

そっと呟くと、何故だか胸の奥がぎゅっとした。

悲しい時のような――、でも少し、違う。

（何かちょっと大きいし）

アスタロトには少し袖が余る。今は広げた手の分くらい、レオアリスの方が身長は高いだろうか。

出会った頃はほとんど変わらない身長だったのにと、ふとそんな思いが浮かぶ。

「――」

視線の先で、レオアリスは乗騎を寄せたロットバルトと会話を交している。この天候のせいか横顔は普段より厳しい。

「やっぱり飛竜はきつかったな」

「一時地上に降りて様子を見ますか？　そろそろ翼の温油を塗り直す時間ですしね」

「そうだな……」

寒冷地を飛ぶ為に、飛竜の翼や躯（からだ）に発熱性のある油を塗っている。二刻前に塗ったばかりで通常なら五刻は保つが、強い寒風と雪のせいでその効果は薄れてきているようだ。

「ついでにもう少し装備を整えた方がいいか。ちょうどこの先にカレッサの街がある。街道筋の街はこれで最後だ、休憩がてら一旦降りよう」

「はは。もうこりゃ一種の作戦行動っすねー」

たかだか温泉に浸かりに行くとは思えない状況にクライフが笑って、レオアリスもにや、と笑みを返した。

「温泉地到達が最大目標のな。無事着けば五割達成だ」

「残り五割は？」

フレイザーが首を傾げる。
「生還したら」
冗談めかしつつ一部に真剣な響きを滲ませているのは、向う場所が他でもない、黒森だからだ。
レオアリスはこの中の誰よりも、黒森の苛烈さを知っている。
真冬のこの時期、黒森を往こうとする者は、常に死を忘れてはいけない。死はまるで初めからそこに居たかのように、いつの間にか傍らに寄り添っている。
クライフはレオアリスの言葉に、改めてそれを肝に命じつつ、頷いた。
「早いとこ五割こなして、温泉浸かって雪見酒と洒落込みたいですね」

一旦降りたカレッサという街は、街道沿いの小さな街だった。レオアリスの言葉通り、黒森の前にある、最後の街だ。
もうこの先は黒森に至るまで街と呼べるものは無く、小村が点在するだけになる。
この街はレオアリスにも馴染みが深く、ここからは故郷も近い。レオアリスは街門の広場でハヤテから降り、感慨深げに街を眺めた。
「懐かしいな――村にいた頃は良くこの村に買出しに来てたんだ。飛竜なら一刻もあれば飛べるけど歩くと丸一日くらいかかるんだぜ」
「へぇー」
「真冬は道が埋まっちまうから、冬の前と、冬を何とか越して春に近付いてきたら……前はここでもかなり開けてると思ったけど、今見ると小さく感じるな」
しかも真冬とあって、街は建物から通りに至るまで厚い雪化粧を纏っている。春や冬の初めの市が立つ時期に比べて人通りもそれほど多くは無く、この街からは王都の喧騒は想像すらできない。
この街を寂しく感じる事が、自分自身の変わり様と、北の辺境地域の変わらない厳しさを改めて突き付けられてもいるようで、複雑な感傷を覚えた。
それも今回のシュランの振興策で少しは変わるのだろうか。
「――」
「しっかし目立つみたいですねぇ」
クライフの言葉に、レオアリスは改めて広場を見回した。
確かに――他から訪れる者も少ない為に、飛竜を連れたレオアリス達は非常に目立った。
そもそも黒燐の飛竜は近衛師団の乗騎と知られていていて、しかも銀翼となれば大将級の乗騎というのは周知の事実だ。
近衛師団と、銀翼の飛竜――、そしてその主が歳若い少年となれば、それが誰なのか嫌でも知れる。
「王の剣士だって？」
通りに出ていた人々の視線が集中するばかりか、わざわざ家の中にいた住民に声を掛けて連れ出しては、レオアリス達を遠巻きに眺めている。
冬のこの時期、この辺りは娯楽が少ない。王都からの近衛師団の来訪など、久々の刺激に富んだ話題とも言えた。
故郷の村に帰るところか、それとも何か任務かと囁き交わす人々の視線は好奇心に満ち、そして好意的だった。
そんな人だかりの中を縫い、この街の警備隊の制服を纏った男達が数名広場に出てきた。四十代前半の男が後ろに続いた警備隊士数名になにやら指示をすると、一人小走りに駆け寄った。
「大将殿」
男はレオアリス達の前に来ると、恭しく一礼した。少しぎこちないその動きに緊張が見て取れる。
「カレッサへお越しいただき、光栄です。私はカレッサの領事館警備隊隊長、リールと申します。その、誠に失礼ながら、近衛師団の方々が今回こちらへお越しの理由は……」
どことなく不安と緊張を交えたリールに対し、ロットバルトが安心させるように笑みを返した。

「お騒がせして申し訳ない。この街へは飛竜の温油を足す為に立ち寄ったのですが、準備が整えば出立します」
「いえ、騒がすなど滅相も――！　しかし左様ですか」
街での案件では無かった事にほっと安堵の息を吐き、リールは気付いて慌てて手を振った。
「あ、こんな場所で失礼しました！　すぐ領事館へご案内します！　もう遅い、今晩は領事館にご滞在になりますか？　あ、いや、すぐに発たれるのでしたね、では少しでもお身体を暖めて行かれては」
多分さっさと行ってもらった方が有難いだろうと思うが、リールは律儀に休息を勧めた。
できればお言葉に甘えてこの街で留まり、明日には王都へ帰りたい、というのが大方の意見ではある。が、それも内心の話だ。
「せっかくのお勧めですが、お気遣いなく。残念ながらこの先のシュランへ行く途中ですので」
「シュラン」
リールはさっと表情を厳しくし――頷いた。
「やはりシュランですか」
「やはり？」
やはりとは奇妙な言葉だ。レオアリス達は顔を見合わせた。
レオアリスが改めて管理に向き直ると、それだけでリールは素早く背筋を伸ばした。
「やはりと言うのは？」
「い、いえ、失礼致しました。ご任務に口を出すつもりはございません！」
今更ながら自分が余計な口出しをしている事に気付いて、リールは口早に詫びた。近衛師団の任務内容は問わないのが不文律だ。
「出過ぎた事を言い、いえ申し上げました、申し訳ございません！」
「問題ない、それより」
やはりという言葉が気に掛かり、レオアリスはリールに一歩近寄ると声を低く抑え、問いかけた。自分達が何も知らないというのはこの際伏せておいた方がいい。
「シュランで何が起きているのか――状況を詳しく教えてもらえるか」
ほっと息を吐き、リールはレオアリスを見て同じように声を低くした。
「その、ご存知の通り、最近シュランは連絡が途絶えています。先月末に王都へご報告してからずっと、あまり状況は変わっていません。激しい吹雪が頻繁に吹き荒れて、シュランへの道を閉ざしてしまっています」
「人手を派遣したんだろう」
「はい、一度は北方公の捜査官も来ましたが、吹雪が激しくて原因は結局判らず――」
レオアリス達はまた顔を見合わせた。ベールの派遣した捜査官が判らないというのは、かなり問題が大きいようだ。
「原因を探ろうにも未だ半日と森に留まれた者がなく、皆吹雪のせいで引き返しています」
「――」
「新しい情報が無く申し訳ありませんが――他でもない大将殿がおいでとあって安心しました。この土地で育たれた貴方なら、きっと原因もわかると思います」
リールは期待を込めてそう言った。そこに込められた期待は、この土地に住む者達の期待でもある。
自分達と変わらない立場から出たレオアリスであれば、厳しい北の大地を、少しでも良くしてくれるに違いない、と――。
「シュランの事業が上手くいけばこのカレッサを訪れる者も増えるはずで、我々としても成功して欲しいのですが――このまま道が閉ざされたままですと、村人の安否すら危なくなってきます。どうぞ、よろしくお願いします」
お気をつけて、と付け加え、リールは恭しく敬礼を向け戻って行った。
レオアリスはリールの姿を見送り、考え込むように腕を組んだ。
「道が閉ざされている、か――」
「大雪で閉ざされちまってるんですかね」

「いや。その程度はここら辺じゃ普通だからな。あんな深刻な言い方はしない。警備隊の人間がああ言う以上、何か他に原因があるんだろう。――アスタロト、大公は何か仰っていたか？」
「え？　……うーん……んー？」
いきなり話を振られ、アスタロトは腕を組んだ。
「そ、そう言えば、ベールの話の途中で出て来ちゃったような……んー」
確かにベールは何か言っていたような気がするが、よく覚えていない。それにあの時の話題に触れるのは、何となく、遠慮したかった。
「あー、いいよ」
しかめ面で唸るアスタロトの肩を叩き、レオアリスは視線を戻した。もうそろそろ日も暮れる。行くのであれば急がないといけない。
「王都に確認を取りますか」
「そうだな――カイ」
ロットバルトの言葉に頷き、レオアリスは彼の伝令使を呼んだ。どこからともなく現れた黒い鳥はふわりとレオアリスの右腕に降り、暫くぶりの北の空気を嬉しそうに嗅いだ。
指先でカイの小さな頭を撫でる。
「悪いけど王都に飛んで、グランスレイから大公に状況を確認してもらってくれ」
カイは了承の代わりにぱちりと丸い眼を瞬かせ、羽ばたきの音を残して空中に消えた。
ロットバルト達はレオアリスの判断を待って視線を向けた。
結局レオアリスが何を選択するかは判り切っている。その判断は、既に温泉地へ行こうという気楽なものではなく、ある意味任務に等しい。
「とにかく、俺達は行ってみよう。もう一刻もあれば着く。シュランの周辺の状況を見て、対応できるかどうか、後はそれからだな」
「承知しました」
三人の纏う空気が素早く引き締まったのはさすがだ。
一人を除いて。
「――仕事……」
アスタロトはとても悲しそうな顔をした。
せっかく仕事を離れて王都も遠く離れて遊びに来たはずが、いつの間にやら普通の任務になっている。
「すぐ宿に行けないの……？」
しょんぼりした様子にレオアリスは思わず笑ってしまった。
「道が雪で閉ざされてても、飛竜には関係ないかもしれないけどな。寒いならお前とアーシアはここで待っててもいいぜ。後でカイを知らせに寄越す」
さっきまでレオアリスはあんまり乗り気じゃなかったのに、と内心思いながらも、アスタロトはアーシアの手綱を掴んだ。
「――行くよ。私が言いだしたんだし、私だって気になるしね」

## 五

カレッサを出て再び飛竜を駆り、半刻ばかりが過ぎた頃だ。
眼下にそれまでは所々でも覗いていた地面の姿は消え、一面雪に覆われた真っ白な世界が広がっていた。そしてその雪原の前方、地平線に黒い帯が一筋、すうっと浮かび上がった。
この国の北限――。
「ヴィジャだ。あと半刻くらいで着くな」
レオアリスの声に懐かしそうな響きが籠もる。
ただ、黒森が己が名を呼ばれたのに気付いたかのように、雪はあっという間に叩きつけるまで強くなり、彼等の周囲で渦巻き始めた。
明らかにそれまでとは違う風が黒森から吹き付ける。先ほど塗り直したばかりの温油も瞬く間に冷えて行くようだ。
「レオアリス、これ、いつもこんな感じ？　やっぱさっきの人が言ってたヤツかな」
「どうだろうな……けど確かに悪天候の部類だ。余り有り難くない」
この天候が頻繁にあれば、黒森に近付くのは難しいだろう。
自分の村は――祖父達はどうしているだろうかと、ちらりと頭を掠めた。
村へも、ここから飛竜で一刻程度で辿り着く。
「――」
だが今は目の前の状況の方が重要だ。アスタロトはアーシアの背中で我が身を抱え込むように縮こまっている。元々火の質のアスタロトには、この寒さは余計堪(こた)えるはずだった。
シュランに到着すれば身体を暖められる。通常ならこのまま半刻も飛竜を駆れば何の問題もなく着くが――。
激しい吹雪はやはり先ほどの官吏の話と重なる。
アスタロト達は残して来るべきだったかと思った時、激しさを増すかに見えた吹雪が、ぴたりと止んだ。
（何か、今――）
大気が震えた気がした。何かの音の余韻のような……。
レオアリスは耳を澄ましたが、その原因は掴めなかった。
風が吹く。
駆け抜ける強い北風が厚い雲を吹き散らす。
唐突に生まれた雲の切れ間から、所々夕方の茜色の空が覗き、差し込んだ夕陽の欠片を浴びて黒森の樹々を覆った雪が輝いた。
キラキラと白銀の表面を金と茜色に染め、その美しさはまるで彼等を迎え入れようとするかのようだ。
「すごい……綺麗ー」
アスタロト達は感嘆の声をもらしたが、レオアリスは眉をひそめた。
（珍しいな――こんな止み方）
もともと黒森の天気は気紛れだが、それでもここまで極端な移り変りは珍しい。
飛竜達は厚い雲と暮れかけて茜色を濃くした、まだらの空の下を駆けていく。
空気は冷たいが遠くまで澄み、穏やかとさえ言える中を五騎の飛竜は悠然と飛んだ。
夕映えが消え、かいま見える空が濃紺に近くなった頃だ。
「あ、あれじゃないすか？」
クライフが指差した先、森の中にぽかりと開けた小さな土地があり、そこからもうもうと白い煙が立ち昇っているのが見えた。
地熱で熱せられ、地盤を抜けて沸き上がった熱泉が作り出す湯気だ。
その合間に、幾つかの屋根が見え隠れしている。樹々に隠れている家もあるのかもしれないが、屋根は十棟あるかないか。村へと続く細い道が森の樹々の陰に見えた。
雪を被っているとはいえ家や道が見えた事に、一行は何となくほっと息をついた。

「無事みたいですね――煙も」
フレイザーが家々から細く棚引く煙を見てそう言った。閉ざされているという話は、思い違いだったのではないか。
「良かったわ」
「すごく小さい村なんだね」
アスタロトが驚いたように呟いたが、本当に、その村は森のただ中にぽつりと存在していた。どこか寂しげに。
「ここらは大体こんなもんだよ。とにかくこれで問題なくシュランに着ける。吹雪がちょうど止んでくれて良かったぜ」
そう言ってハヤテの騎首を向けかけ、レオアリスはふと手綱を繰る手を止めた。
同時に――、何かが吠えた。
レオアリスは視線を眼下に落とし、咆哮の沸き上がる場所を探した。黒森のどこかからだ。
弦楽器の高音を引き伸ばすような響き。
長く甲高い、悲しげな咆哮が白銀の世界を凍らせるように響いている。切れ切れに覗く暗い空に吸い込まれるように。
「――」
「何？　狼とか？」
「いや、狼はこんな遠吠えはしない」
ヒィィ、と大気を震わせる余韻を引き、咆哮は消えた。
「声量からすると相当の体躯をしていそうですが――何も見当たりませんね。まあこの上空からでは樹の陰までは見通せませんが」
ロットバルトは白い森を見渡し、レオアリスの判断を待って視線を向けた。
「そうだな――取り敢えず、黒森の獣達は俺達から近付かない限り襲っては来ない。腹を空かせてりゃ別だが、上空だしな、それほど問題は無いだろう。このまま村まで行こう。少し――」
レオアリスの声に微かな緊張が混じる。あの咆哮が沸き上がった辺りは、村に近かった。
「村が心配だ」
「了解、急ぎましょう」
クライフが飛竜の手綱を引き、飛竜の翼が空気を打つ。
一転――
空は瞬く間に掻き曇り、激しい風と雪が叩き付けた。風と風とが渦巻きぶつかり合い、世界を捻る。
くるくると変わる天候にクライフが閉口気味に唸った。
「何だこりゃ……上将！　ちぃっと不味いっすね！」
風は四方から彼等を煽りたて、飛竜を操るのさえ困難なほどだ。既にお互いの姿は雪と風の幕に隔てられ、会話も大声を出さなければ聞き取れない。
レオアリスは地上から渦巻いて吹き上げてくる吹雪の流れを睨んだ。ハヤテの強靭な翼ですら悲鳴を上げている。
「仕方ない、降りよう！　このままじゃ巻かれて墜ちる。下に村への道がある。そこなら飛竜を降ろせるだろう。はぐれないように降りろよ！」
すっかり視界を覆い尽くした雪の幕の向こうから、クライフ達の微かな返答が返る。
「アスタロト！　降りられるか？！」
大丈夫、と切れ切れの声が届くが、アーシアの姿は見えない。
風の唸りの中に、もう一度あの咆哮が混じった。
一際（ひときわ）激しい風がうねり、ハヤテの躯が突風に煽られる。
その風すら貫いて響く咆哮は僅かな躊躇いを呼んだが、今や体勢を保つ事すら難しい。
レオアリスは手綱を引いた。
「ハヤテ、下だ」
ハヤテは空気を翼で大きく一打ちして方向を変え、次いで翼を折り畳むようにして風を切り下降した。森の中の村への道を目指して降りる。

ハヤテもクライフ達の騎乗する飛竜も、軍の作戦行動を行う為に訓練された飛竜だ。黒鱗の飛竜はこの激しい吹雪の中でも、大将であるレオアリスの指示と銀翼の動きに着実に従った。
風に押されながらも飛竜達は黒森の中に降り立った。
辺りを確認すれば、意図したとおり、村へ続く細い道に降りられたようだ。
森の中は樹々が防風の役目を果たし、上空ではあれほど厳しかった風雪もどこか穏やかに感じられる。
僅かに息を吐き、レオアリスはまだハヤテを中空に浮かせたまま、空を見上げた。
空は黒い樹々の影と混じり合いながら、厚い雲と雪とで灰色の斑（まだら）に塗り潰され、まるで画家が闇雲に筆を振るった画板のようだ。
（こんなに荒れるなんて）
先ほども感じたが、ただ激しい吹雪ならばともかく、これほどの急激な変化を伴う荒れ方は、十四年間黒森に寄り添って暮らしたレオアリスでさえ経験した事が無かった。
黒森は、その懐に迎え入れた者には優しくすらある。
やはりリールの情報どおり、この激しい吹雪には何らかの原因があるようだ。
道が閉ざされ、村との連絡が途絶える――。
そして黒森がこれほどに荒れる要因――それはあの咆哮だろうか。あの声が響いた後、天候が変わった――。
（天候を操る魔物――？）
いないとは限らない。黒森は想像以上に広大で深淵な、魔物達の擁地だ。
そこに気を取られていたレオアリスは、フレイザーの緊張した声で初めて事態を知った。
「上将、アスタロト様がまだです」
「何――」
ぎくりとしてレオアリスは周囲を見渡した。
フレイザーの言う通り、アスタロトとアーシアの姿が無い。
「――アスタロト！」
張り上げた声は虚しく雪に吸収され、ただ吹雪の荒れ狂う音が返るだけだ。
（しまった）
どくん、と鼓動が鳴る。
アーシアを先に降ろすべきだった。
作戦行動と変わらない意識でいたつもりだったが、そもそもアーシアは軍の訓練など受けていない。
あの風で流され、降りる位置がずれたのだ。
「――あー、もう、何考えてんだ俺は！」
自分の判断の甘さに腹が立ち、レオアリスは拳を握り締めた。
「アスタロトとアーシアを最後に確認したのはどの時点だ？」
ロットバルトが樹々の間に視線を巡らせる。
「降りる間際まで公の騎影が左手にあったのは確認しています。直後に西から風の煽りを受けましたが」
「私の正面です。下降時には吹雪が視界に被って――西からの風を受けた時点では……」
「けど降りる間に方角なんて狂っちまってるぜ。日も暮れちまってどっちが西だか東だか判りゃしねぇ」
「とにかく手分けして探しましょう、きっと近くにいらっしゃるわ」
レオアリスは中将達の話を聞きながらじっと考えていたが、首を振った。
「いや――個々に当てもなく動いても雪に巻かれるだけだ」
「ですが」
フレイザーは落ち着かない顔でレオアリスを見た。レオアリスが一番ここに詳しいとは言え、周囲を吹き荒れるのはそれ以上に不安を覚えず

にはいられないほどの吹雪だ。
「大丈夫、仮にも炎帝公って呼ばれる位だ、さすがにこの状況じゃ無茶はしないだろうし――」と言って見回した部下達の顔は、レオアリスの言葉には領き兼ねる様子だった。レオアリスは不安が増した。
アスタロトが、無茶をしない。
言葉として成り立たない気がする。
「ま……まずはカイを戻して飛んでもらう。それが一番確実だからな」
カイはまだ王都から戻っていないが、グランスレイへの伝言よりも先にアスタロト達を探すのが優先だろう。
「アスタロトを見つけてから移動を」
「上将」
フレイザーが緊張を帯びた声でレオアリスを呼んだ。振り返った視線の先、フレイザーが指差した辺りの雪が動いて――盛り上がっていく。
「何だ？」
クライフが飛竜に括り付けていた槍を抜き取った。穂先が白い雪の中で鈍く光る。
レオアリス達の前で雪は腰の高さまで盛り上がり、そして獣の姿を形造った。
現れたのは真っ白な一頭の雪豹だ。
「まさか」
あの咆哮の主かと一瞬四人に緊張が走ったが、すぐに気が付いた。
額に微かに光る近衛師団の紋章が刻まれている。
紋章が強く光り、光に呼ばれたように雪豹の背にカイが降りた。
「カイ――なるほど、エンティの伝令使か――」
レオアリスは雪豹に歩み寄った。
第一大隊の法術士長エンティの伝令使は、カイとはまた違って一定の姿を持たず、その代わり状況に合わせた姿を取る事ができる。
カイが自分の背を離れてレオアリスの肩に戻ると、雪豹はレオアリスを見上げ、鋭い牙を持った顎を開いた。そこに一通の封書が置かれている。
レオアリスは封書を手に取り、開いた。
「グランスレイからだ」
「副将から？」
フレイザーが素早く近くに寄る。
レオアリスは書状を読みながら眉をしかめた。グランスレイから伝えられた事は、ベールが近衛師団に当てた書状の内容と同じ事だ。ベールの書状も重ねられていた。
グランスレイは、レオアリス達がまだ黒森に入っていなければ、王都へ戻る事を促していた。
「これで飲み込めたな」
ロットバルトはグランスレイの書状とベールの書状を読み、肩を竦めた。
「大公も最初から把握していた訳だ。人の悪い――上手い事乗せられたようですね」
「どうしましょう。いくら大公のご依頼とは言え、副将の仰るとおり、アスタロト様を見つけたら王都に戻りますか？」
「そうするのが一番だろうが……、シュランの村が気に掛かるな。さすがにこの状況を直に見て、放って帰る訳にも行かない。周辺に波及しても困る」
この場所は、レオアリスの故郷にも近い。
それに気付いて、中将達は表情を引き締めた。
「アスタロト達を見つけたら、あいつらはカレッサに帰そう。フレイザーが付いてくれ」
「承知しました」
「この吹雪だ、クライフ達も一緒に戻った方がいいかもな」
吹雪に慣れないクライフ達を考えての言葉だったが、二人は視線を交わし、それぞれに見慣れた笑みを浮かべてみせた。
「冗談でしょ――大将一人残すほどへたれちゃいませんよ」

「まあ、私はもともと任務で来てますからね、何も問題ありません」
彼等からすれば、レオアリス一人に任せて帰るなど有り得ない。それは戦闘時だけで充分な話だ。
レオアリスは有難く受ける事にした。
「悪いな――。カイ、アスタロトとアーシアの気配を辿れ。見つけて、既に森の中に降りていたら先ずは動くなと伝えるんだ。すぐに俺に知らせに戻ってほしいが、周囲の地形によっては――」
ふ、と空気が変わる。
肌に触れる感触がはっきり判るような変わり方だった。
再び――、あの引き裂くような咆哮が沸き上がった。
彼等からはまだ遠いものの、上空で聞いた時よりも近付いている。吹雪の幕すら貫き、長く、尾を引いている。
周囲で、再び吹雪の激しさが増した。
レオアリスは厳しい表情でカイを見つめた。
「周囲の地形によっては、吹雪をしのげる場所へ誘導してから戻れ」
カイが一声鳴いてレオアリスの肩から消える。
レオアリスは改めて辺りを見回した。
咆哮は既に止んでいたが、重く身に纏い付く空気が流れている。
「近くなったな」
雪豹の前に膝を付き、双眸を見つめる。
「グランスレイに伝えてくれ。『既に遭遇した。状況を確認し、可能なら問題を取り除く』」
雪豹はぶるりと身を揺すり、また元の雪に戻って崩れ落ちた。

六

アスタロトとアーシアは下降時に西風に煽られ、レオアリス達とは大分離れた場所に運ばれていた。
「しまったなぁ、離れちゃった」
歩いたとしたら、雪の森の中というのも考慮すれば一刻は掛かるだろう。
しかしとにかく、森の中に降りたお陰で、一番の難点だった風が弱まったのが有難い。ひと先ずはほっと息をつき、アスタロトはアーシアの背から降りると労るように長い首をなぜた。
「アーシア、大丈夫？」
青い鱗から凍る冷たさが指先に伝わる。ただでさえ普段からひんやりしているのに、これでは氷になってしまいそうだと、アスタロトは不安になった。
アーシアは寒さよりも悔しそうに長い首を垂らした。
「平気です。すみません、僕だけ離れてしまって――力不足です。ハヤテみたいに飛べればいいのに」
「いいの、アーシアはそんな筋肉たっぷり暑苦しくならなくたって。ハヤテもさあ、まだ子供だけど、もしアーシアみたいに人の姿を取れたら、もうワッツ並の筋肉かもよ。それより寒いでしょ、戻りなよ」
「はは。ハヤテはそこまでがっちりしてないですよ。彼は飛ぶのが上手いんです」
ふるりと身を揺すり、アーシアは少年の姿に戻ると荷物を持ち上げた。
「そういう所はやっぱりレオアリスさんに似てますね」
「へぇー、飛竜同士はそういうの判るの？」
アスタロトが興味深そうに瞳を見開く。
「とにかく大丈夫、すぐ追い付くから」
そうは言ったものの、特に根拠がある訳ではない。
樹々に取り囲まれたこの場所からどちらへ行けばいいかも判らず、意

識を凝らしてみても辺りには人や生物の気配すらない。
気付けばすっかり陽も落ち、森は白い雪の中にぼんやり浮かび上がっている。
以前、家を飛び出してアーシアと二人、西のカトウシュの森に入った事があったが、カトウシュが纏っていた空気よりもここはずっと重く密度があるように感じられた。
「ここが、あの黒森か――」
あの、という言葉に込められたのは、畏怖の思いだ。
辺境に横たわる、深く広大な森。通り抜ける事は不可能と言われ、黒森を横断したという話をアスタロトは聞いた事が無い。
それでも、この黒森の向こうにも、まだ国があると言うが。
「――やっぱすごいね。樹が迫ってくるみたい」
カトウシュの樹々は幹を真っ直ぐ空へ伸ばしていたが、この黒森の樹々は枝が方々に腕を伸ばし、太い幹ですら多くは捻れまるで身を捩っているように見える。
吹き付ける風雪を受け、長い歳月を経る間に捻れていったのか。暗い陰の中に浮かぶ幹や枝葉は恐ろしげな表情をしていた。
果たして黒森には、暖かい太陽の光が差し込むのだろうか。一切を枝葉に遮られ、昼間でも夜の如く暗いのではないか。
全ての生物が息を潜め――いや、一切の生命の存在を許さず。
そう思わせるほど、辺りには生物の気配がない。
吹雪のせいとは判ってはいるが、風の音と樹々のうねりだけが響く森の中は、息をしているものが世界で自分達二人だけなのではないかと思えた。
アーシアは樹々を見回しているアスタロトの面に隠した不安を認め、そっと背中に手を当てた。
「本当に深い森ですね」
その言葉は、アスタロトの瞳に強い光を灯した。
「大丈夫、私がいるよ」
アーシアがそっと笑みを浮かべる。アスタロトがアーシアを守ろうとしてくれるのは、もうずっと変わらない。
けれど本当は、アーシアがアスタロトを守れるほど強くなりたいと、ずっとそう願ってきた。
「僕もいます」
そう言うと、アスタロトはちょっと瞳を見開いてから笑った。
「――うん」
「それに」
アーシアは樹々を見回し、どこかにあるかもしれない記憶を捜そうとした。
「ここでレオアリスさんが育ったんですよね」
アスタロトの瞳に、綺麗な炎が踊る。
「そうだ――」
黒森にもまた生命は満ち、太陽は昇る。
この森は、彼女の大切な友人が育った場所だ。
その事は、アスタロトの中で膨らみかけていた不安を消してくれた。
「――レオアリス」
零れる吐息さえ押さえてそっと名を呼んでみると、胸の奥の方に温かい塊が生まれる。すっと息を吸い込んでも、冷えない塊。
そのまま、大きな声で呼んだ。
「レオアリスー！　いるー？！」
声はあっという間に雪に吸い込まれてしまう。
ただ。
吹雪のせいではなく、黒森が枝を揺らした気がした。
「――」
そう思ったというだけだ。しかしアスタロトは黒森を見上げた。
「ねぇ、レオアリスがどこにいるか知らない？　ずっとこの森の傍に住んでたんだ、覚えてるでしょ？」
別に答えを期待していた訳ではなく、何となく。

「アスタロト様？」
「だって絶対あいつ、子供の頃黒森で遊んでたぞ。そんな奴あんまいないだろうから、覚えてるかなーっ……て……、……ふぁっくしゅ！　寒いっ」
アーシアは荷物から毛布を取り出すとアスタロトの肩にかけた。
「それで……」
「――何も変わらないね」
それはそうだ、と二人は顔を見交わせて笑った。
森との会話など、高等法術だ。単純な単語のやり取り程度でも、かなり体力と精神力を消耗するのだと、以前レオアリスが言っていた。
そんな事を思い出し――アスタロトとアーシアは、ふと懐かしむような、それでいて気持ちが引き締まったような顔になった。
あの時、カトウシュの森で、レオアリスはアスタロトとアーシアを助けてくれた。
もう四年近く前の思い出が、昨日の事のように脳裏に浮かぶ。
何となく暖かい、胸の詰まるような気持ちになるのは、懐かしいせいだろうか。
会いたい、と思った。
顔を見たらきっと、安心する。
「早くレオアリスさんと合流したいですね」
アーシアに考えていた事が伝わってしまったような気がして、アスタロトは落ち着かなく瞬きを繰り返した。
「そ、そう？」
ただアーシアには含みは無かったようだ。
「そうですよ。やっぱり一番、この森との付き合い方を知ってると思いますし、頼りになります」
「ま、まあそうだよね」
言葉を濁したアスタロトを見て、アーシアは殊更まじめな顔になった。
「こんな状況だと、あのカトウシュの森を思い出しますね。最初はアスタロト様が拗ねてしまって、どうなる事かと思いました」
「拗ねてなんかいないよ」
アスタロトが唇を尖らせる。
「……あの時、アスタロト様がレオアリスさんと会えて良かったなぁって、僕いつもすごく思うんです」
もしあの時会えていなかったら、今はとても違った状況にいただろうから。
「――うん」
アスタロトの頬に、この雪にも負けずに乗っかった色を見て、アーシアは微笑みを浮かべた。
その笑みは少し寂しそうな硝子色をしていたが、アーシアはすぐにそれを隠した。
「きっと捜してますよ、早く合流しなきゃ」
アスタロトが胸の前で腕を組む。
「うん。とにかく、これはさぁ、黙って待ってる訳には行かないよね」
「そうですね」
「いっつも助けられる側じゃ納得できないし。こっちからレオアリス達を見つけてやるみたいな気持ちで臨まなきゃ」
多分今のアスタロトの言葉を聞いたらレオアリスは力一杯止めたと思うが――アスタロトはそもそもただ待っている性格ではない。
そしてアーシアはそんなアスタロトを心から敬愛していた。
要は未だ、ほんのちょっとばかり、世間知らずな二人組だった。
「よーし、行こう！　降りた時こっち向いてたから、こっちかな」
「はい！」
アスタロトは勇ましく歩き出したが、単なる勘だ。残念ながら。
しかし何故か、アスタロトの足取りには迷いはなく、更に残念ながら、方向は大体合っていた。
ただし、レオアリス達が降りた場所にではなく、村がある方向に。

そうして二人の姿は吹雪の幕の中にあっという間に飲み込まれていった。

七

歩き出したはいいが――
寒い。
上空の激しい風雪から逃れ、森の中に降りたばかりの時は暖かいとすら感じていたのに、それは幻想だった事にもはやアスタロトは気付いていた。
歯の根が合わず、奥歯が勝手に打ち合ってカチカチと音を立てている。
歩き出して四半刻足らず……
「さぁ～むぅ～いぃ～！」
と冒頭の通り叫ぶ事になった。
「レオアリス、どこぉ～！？」
何度か叫んでみたが、雪の音以外返る音は無い。
「うっ……」
歩き出した事が間違いだったと、やはりアスタロトは気付いていた。
じっと待っていれば、カイが捜しに来てくれたのではと、ちらりと思う。
多分、いや、きっとそうだ。
レオアリスなら先ず、確実に二人を見つけられるカイを捜しに向けるだろう。
少し待っていれば――暖かい温泉もそう遠くは無かったのだ。
そう思うと寂しさと情けなさと温泉の温もりを求める気持ちはアスタロトの中でぐんぐん膨れ上がった。
「温泉……温泉どこぉ～！」
湯けむりがもうもうと立ち上がり、身体の芯まで暖めてくれる奇跡の泉――
豪華な食事などいらない。
凍えきった身体を温かなお湯に心行くまで浸せるなら――
「温泉……」

立ち上る湯けむり。
幻を見るようにアスタロトは瞳を細め、それを手繰り寄せようと手を伸ばした。
「温泉……。……あれ、何か段々あったかくなって来たよね～」
「？　そうですか？」
アーシアは訝しそうに周囲を見回した。吹雪は吹き止まず、寒さは一向に和らいだ気配もない。
「そうだよ。あー、何だかあったかくて眠くなってきた……あ！　温泉見っけ！」
アスタロトが指差した方向には、当然温泉など無い。
「……アスタロト様？」
「あったかそう～」
アスタロトは遠くを見る眼差しで、前方の吹雪の幕を見つめている。
「あ！　アーシア見て見て～。熊が温泉入ってるよ、うぷぷ」
「ア、アスタロト様ぁー！！」
ここら辺でもう一度、お断りしておくべきかもしれない。アスタロトは見た目相当な美少女だ。
とにかく真っ青になったアーシアがアスタロトを揺さぶり、アスタロトだけに見えていた目の前の情景がふっと消えた。
アスタロトは小首を傾げ、長い睫毛を瞬かせた。
「……あれ？」
「しっかり！　しっかりなさってくださいー！！」
「アーシア、どうしたの……？」
「アスタロト様っ」
アーシアの青い瞳には涙が溢れている。
「僕が……、僕が不甲斐ないばっかりに……！」
「……、アーシア、あれ」
「アスタロト様！」
まだ朦朧としているのかと、アーシアはアスタロトの肩に縋りかけたが、アスタロトはそっとアーシアの手を取った。
「しっ――隠れて」
既にアスタロトの面には、普段の――いや、厳しい表情が戻っている。今日一番の、厳しい面差しだ。
アスタロトはアーシアを引っ張り、手近な大木の陰に隠れた。
「アスタロトさ……」
さっとアーシアの口を塞いだ時、揺れる木立の間を漂うように、細く高い咆哮が沸き上がった。
上空で聞いた咆哮と同じ。
ヒィィ……と高く、空気を切り裂いて届く。
「――アスタロト様」
「大丈夫、けど……」
近い。
音は聞こえないが、重く、大きなものが動く気配がある。空気が揺れる感じだ。
吹き荒れる吹雪が、質量を増す。樹々の枝が突風に折れそうなほどたわんだ。
アスタロトは正面の樹々を睨んだ。
咆哮は長く尾を引いていたが、雪の音に紛れるほど小さくなってやがて消えた。
「アスタロト様、今のは……」
「さっきのヤツだな。この辺りにいるんだ――。いいや、とにかく行ってみよう」
「行くって……、それは駄目です！　危ないですよ！」
アーシアは青くなってアスタロトの腕を引っ張った。
黒森の魔物や獣といえば、危険なものが多いと聞く。いくらアスタロトとはいえ、不用意に近付くべきではないはずだ。
「できるだけ離れなきゃ」
「ん、でも気になるし。何となくだけど、この状況の改善方法はあれに

ある気がするんだ。あの咆哮が聞こえたら吹雪が強くなったしね」
「ですが……」
アスタロトは勘が鋭い。
確かに、あの咆哮の主がこの天候に関係があるのかもしれないが、しかしアーシアとしてはわざわざ危険に近付いて欲しくはなかった。
炎を操る力も万能ではない。
「平気平気、いつまでもこうしていられないし。行こう」
アスタロトがそう言った時、それを咎めるように鳥の鳴き声がし、目の前を黒い塊が過った。
「きゃ」
アスタロトは思わず腕を上げて顔を庇ったが、何かに髪の毛を引かれ、おそるおそる眼を開けた。
見覚えのある黒い鳥が、もう一度クワァ、と声を発した。
「あー！　カイ！　お前、やっぱり来てくれたの？！」
カイはアスタロトが伸ばした腕にふわりと降りた。
黒い羽も雪で真っ白になり、さすがに全身でカタカタ震えている。
金色の丸い瞳が三角ぎみになっていて、どことなく、恨みがましい光が浮かんでいるようだ。
アスタロトはカイの瞳をじっと見つめた後、そおっと聞いた。
「――もしかして、すんごく探した？」
カイがばさりと羽を広げる。
「ゴメンゴメン！　ほら、ただ待ってるのは悪いかなーって」
吹雪のせいで気配が辿りにくく、しかもアスタロト達が移動していた為、カイはかなり苦労をしてようやく二人に辿り着いたのだ。
カイは口を開き、レオアリスの伝言を伝えた。
勝手に動くなよ、とレオアリスの声がアスタロトに釘をさす。
アーシアはほっと胸を撫で下ろし、アスタロトに諭すような笑みを向けた。
「アスタロト様、動いちゃダメですって」
「――判ったよ」
むう、とアスタロトは唇を尖らせ、腕を組んだ。カイも主の命を果たせ、ほっとした様子で辺りを見回している。
「でもさぁ、アイツちょっとえらそくない？　自分だけ何か物事判ったような感じでさっ」
「充分判ってると思います」
「――アーシアひいきだ」
「違いますよ」
そんなやり取りを横目に、カイは近くに風を避けられる場所が無いかと辺りを見回していたが、不意に翼を広げ高い声で鳴いた。
耳を打つ、警告の響きだ。
「何……」
アスタロトがカイを見つめ、その原因を尋ねようとした時、低い唸り声が聞こえた。
遠くで轟く雷鳴のような――、肉食動物を思わせる。
アスタロトが身構え、周囲に意識を向ける。
唸り声と、雪を踏む重い足音。
（近い――）
足音の主はもう数本の木立を隔てた向うに来ている。
吹き荒れる雪と風に紛れて判らなかったのだ。
「アスタロト様」
「しぃっ……さがってて」
片手でアーシアを庇うように押しやり、アスタロトは周囲に視線を巡らせて声の主を探した。
唸り声はゆっくり、移動している。
最初は背後、次に右、そして正面――
次々と位置を変えていく。二人を中心に回っているようだ。
ジリジリと包囲を狭め、唸り声は次第に大きくなってきた。

アーシアがぐっと息を潜める。
「――アスタロト様」
吹雪の向こうの暗がりから、彼らを睨み付けて輝く二対の瞳が見えた。
「アーシア、私の後ろに」
いつでも迎え打てるように集中し、アスタロトはもう数歩アーシアをさがらせた。
「アスタロト様、お気をつけて」
（来る……）
雪を踏む音――息遣い。
牙の間から荒く洩れる呼吸音。
強靭な両脚のたわむ筋肉まで想像できそうだ。
両脚を屈めて力を張り巡らせ、まさに、アスタロト達に飛びかかろうとしている――
アスタロトは笑みを浮かべ、唸り声の方向を睨み付けた。
「来るなら、」
――ズボ！　というような大きな音がすぐ後ろでして、アスタロトは驚いて音のした方を振り返った。
彼女のすぐ後ろにはアーシアが居たはずだ。
「……アーシア？」
視線の届く限り、アーシアの姿が無い。
忽然と消えた。
「アーシア！　アーシア？！」
アスタロトの頬から血の気が引き、背後の獣の気配すら構わず、アスタロトはアーシアの名を呼んだ。
「アーシア、どこ？！　アーシアァ！」
ふっと背後に圧迫感を感じ、アスタロトは左へ飛んだ。強烈な突風が駆け、たった今アスタロトがいた場所を、白い影が過る。
影は吹雪を切り裂き、反対側の木立に消えた。
アスタロトは左腕を見つめた。外套で済んだものの、すっぱりと鋭い刃物で断たれたように裂けている。
再び、唸り声が迫った。
「――うるさい、邪魔するな！」
アスタロトが腕を頭上に掲げる。
手のひらから炎が流れ、放射状に飛散するとアスタロトの周囲に炎の壁を作った。
壁の向こうに迫った何かが、たたらを踏んで立ち止まったのが判る。
ただ、それ以上アスタロトは構っていられなかった。
「アーシア！」
忽然と消えたアーシアの姿を、蒼白な面のまま探す。
吹雪く白い雪と、燃え盛る炎――。
「アーシア、どこ？！」
いない、いない、いない――。
アーシアがいなくなってしまった――
心臓が、ぎゅっと掴まれる。
怖い。
混乱と這い上がる恐怖の中で、アスタロトはアーシアの名を呼んだ。
「アーシアぁ！」
「……です」
微かな声が、返った。
「アーシア！」
どっと全身の血が体内を駆け巡る。安堵の息を吐き出したものの、アーシアの姿はまだ見えない。
「ここです！　……アスタロト様！」
アスタロトは忙しなく視線を彷徨（さまよ）わせ、声の洩れて来る場所を探し――、驚いて駆け寄った。
地面だ。
正確には地面の下――、雪で覆われた足元に人が一人通れるくらいの

縦穴が開いていた。
　確かに雪が滑った跡がある。
「アーシア！　そこにいるの？！」
　しゃがみ込んで呼ぶと、暗い穴の底からアーシアの声が上ってきた。
「穴に落ちたみたいです、すみません！」
「大丈夫？！　怪我は？！」
　声は穴の中でぼんやり反響している。下はそれなりの空間がありそうだ。
「ありません――でも、ちょっと出られないみたいで……」
「飛べない？！」
「その穴が、飛竜の姿で出られる大きさじゃないんです」
「判った」
「申し訳ありません。でも、この中は暖かいから、僕はここに暫く居ても平気です、アスタロト様は先にレオアリスさん達と合流して……」
「私も行く」
　躊躇なく言い切ると、アーシアにその言葉が届く前に、アスタロトは暗い穴に飛び降りた。

八

　カイは吹雪の間を飛び越え、主の肩に降りた。
「カイ――、早かったな、アスタロトは」
　アスタロトを探しに行かせてからまだ四半刻しか経っていない。もう見つかったのかとほっとしたのも束の間、カイの報告を聞く内に、レオアリスは眉を寄せた。
　咆哮の主との遭遇も無視できない話だが、問題はその先だ。
　アスタロト達が落ちたという亀裂。
「地面の下か……妙な事になってきたな」
　黒森の地形は複雑で、この中で一番詳しいレオアリスでさえ、自分の村の周辺以外は今一つ判らないと言わざるを得ない。
「上将、アスタロト様は……」
　状況を聞いてフレイザーは青ざめ、心配そうだ。
「やはり、無理にでもお止めするべきだったでしょうか」
「いや……」
　口籠もったのはそれを否定できなかったからだが、今その事を言っても仕方がない。
「とにかく、二人とも無事なんだな？」
　カイに確認し、レオアリス達はひとまず胸を撫で下ろした。
「すぐに行こう。カイ、案内してくれ」
　と言って歩き出したものの――レオアリス以外はこんな雪は経験した事が無く、吹き溜まった雪に足を取られ、素早く移動という訳にもいかない。
　クライフはすぼ、と足を引き抜き、すぼ、とまた踏み出し、数間ほど歩いた後閉口して悲鳴を上げた。
「こ……これで重しでも背負ってりゃ、雪中行軍訓練ですね！」
「だから言ったじゃねえか、真冬の黒森なんて訓練くらいにしかならないって。今度は夏に来ようぜ、夏に」

器用に雪の上を歩きながらレオアリスが笑う。
「な、夏はいいっすけど、こんなキッツい、訓練になるって、判ってりゃ来ません、でしたよ～」
クライフは雪を踏み固めるように歩くせいで、一歩一歩にかなり力が入っている。
「そこまで力まなくてもいいんじゃないか？」
「いやいや……くっ……じょ、上将は、剣士だから生まれつき、身体、能力が……おりゃ！　……高いのかと思ってましたが、どっちかっつーとこのッ、せいっスね！」
「喋っていると舌を噛みますよ」
斜め前を歩くロットバルトは同じような苦労を強いられているにも関わらず、何故か端正な身のこなしだ。
「……いーからお前も手伝え」
恨めし気に睨みつつも、クライフは声を落とし素早く目配せした。ロットバルトはちらりとその方向――クライフの後ろを歩くフレイザーを見て、肩を竦めてからクライフに合わせて位置を変えた。
フレイザーが歩き易いようにと、クライフはこっそり雪を踏み固めているのだ。
「少しは口に出せばいいものを」
「何か言ったか？」
「いえ、別に」
クライフがフレイザーに気があるのは、非常に判りやすい。
その恋が成就するかどうかは別として――クライフはこれまでも中々はっきりと言葉で伝えようとしていない。
だから判りやすいが故に、フレイザーには基本、冗談と受け取られているようだ。
大きな問題が一つあるにしろ、本気で意思表示すれば結果が変わらない事もないとは思うが、追及するのも面倒なのでロットバルトは話題を切り替えた。
「公が落ちたという亀裂――内部が広くて暖かいのなら、この吹雪の中に置かれるより安全とは言えますが、問題はそれがどういう状況下にあるかですね」
ロットバルトの言葉にレオアリスも頷く。
吹雪は簡単に収まりそうもないほど吹き続けていて、ロットバルトの言う通り、避けられる場所にいるならそれが一番いい。
「ただの亀裂か、それとも地下で広がってるのか――。広がってるとちょっと厄介だけどな」
アスタロトがあちこち動いて、というのは付け加えなかった。
フレイザーは少し羨ましそうに両腕で自分の身体を抱えた。例え近衛師団中将といえども寒いものは寒い。呼称や地位など燃やしてみても一瞬の暖にもならないだろう。
「暖かいのは今は貴重ですね、私も今すぐ落ちたいくらい。けど、何かの棲み処（すみか）になってる可能性は考えられます？」
「充分あるかな。ここの獣達もやっぱり寒くないのに越した事はないから、他に入り口があれば巣穴にしてるかもしれない」
クライフはドス、と雪を踏み締め、この寒さでさえ吹き出してきた額の汗を拭った。汗は吹き出した傍から冷たくなり、素早く拭わなければ凍傷になりそうだ。
「その場合は、どの程度の獣かですねぇ。ま、アスタロト様なら大抵、平気でしょうが」
「そうだな……、寒いよりましだろう」
「俺達が行く前に、もう一個温泉が、できちゃったりして」
もし獣と遭遇した場合も、暖かい場所にいるアスタロトは何となく無敵な気がして、クライフはあっけらかんと笑った。
「いっそ俺達も、亀裂探して地面の下に、降りませんか。そこら辺探しゃ、あるんじゃないスかね」

「かなり魅力的だけど、飛竜が入れないわよ。それにアスタロト様のいる場所と繋がってるとも限らないし」
飛竜と聞いて、ロットバルトは傍らを歩く飛竜へ視線を向けた。
「飛竜は一先ずカレッサに帰した方がいいかもしれませんね」
躯の大きな飛竜が狭い樹々の間を飛んで抜けるのは難しく、飛竜達はハヤテも含め、短い足で歩きにくそうに進んではちょっと跳び、を繰り返している。
その度にズシンズシンと音が響き、こんな状況でありながら、かなり賑やかな行進だ。
思わず吹き出し、それでもレオアリスも真剣な面持ちで頷いた。凍え死ぬ心配は無いのだが、相当不自由を強いている。
「そうだな、悪いけどハヤテとフレイザーの飛竜だけは残ってもらって――」
その、ハヤテや飛竜達が、不意に低く唸った。
その場に身を伏せるようにして止まり、長い首をもたげて辺りを伺っている。
「どうした？」
と問うと同時に、それは響いた。
咆哮――
「近ェ」
クライフが振り仰いだ喉で呻く。
近すぎる。
吹雪を縫って、咆哮は良く聞こえた。
鼓膜に突き刺さり、レオアリス達の皮膚を震わせる。
高く吼え、尾を引き――
一瞬の空白の後、低い雷鳴のような唸り声に変わった。
左手の樹々の奥。
透かし見る事はできないが、距離で言えば十間離れているかいないか。
「――雪が」
フレイザーが舞い落ちた雪のひとひらに手を伸ばし、それから驚いた顔で空を見上げた。
止んだ。
雪も、止め処なく吹いていた風さえもなりを潜め、枝の先すらそよがさない。
木立は今までが嘘のように奥まで見通せたが、唸り声の主の姿はまだ見えなかった。
唸り声の切れ間に、静寂が森に落ちる。
小動物が雪を踏む微かな足音さえも聞き取れそうだ。
レオアリスは唸り声と対峙するように向き合った。
「ここで対応しますか」
ロットバルトが剣の柄に左手を置く。
アスタロト達が落ちた場所はまだ先だ。方向の主が一頭のみで直後に向かっているとしたら、あの咆哮の主は確実に、侵入者を目指して歩いてきているようだった。
「――何が目的だろうな」
呟いたレオアリスの言葉を聞き取り、ロットバルトは一度レオアリスの横顔に視線を落とした。
「――」
ただ縄張りを侵した相手を噛み砕く為か、空腹を満たす為か。
レオアリスは今判る中で、一つ、明確なものを口にした。
「狩りじゃない。全員吹雪に阻まれて、近付くのを断念しただけだ」
空腹であれば調査に入った者のうちに犠牲も出ていただろうが、全員無事に戻っている。怪我をした者がいたとは、ベールの書状にもカレッサの警備隊の話からも伺えなかった。
「気になるな――」
そう呟いて、レオアリスはロットバルト達へ後方を示した。
「飛竜を連れて三間退け。吹雪が止んで好都合だ、騎乗できる」

唸り声はまだ続いている。じっとこの場を伺っているようだ。
レオアリスは一人同じ位置にあり、唸り声を左手に聞きながら声と平行するように、来た方向へゆっくり足を向けた。
ロットバルト達のいる場所から、レオアリスの姿が木立の間に見え隠れして離れていく。
見た目には、ただ歩いているだけだ。
「何やってるんだ？　上将は」
「測っているんでしょう」
「測って？」
ロットバルトが説明を加える前に、唸り声は糸のように細くなり、――止まった。
耳が痛くなるような沈黙が落ちる。
レオアリスがまた、向きを変えて声の方向へ近付く。
再び、唸り声が沸き起こった。
「困るな――」
声の方へ踏み込むか、アスタロトのいる方向へ進もうとすれば、威嚇するように唸りは大きくなった。
いや、事実威嚇だ。
「どうやら行かせたくないらしい」
とは言え、引き返す訳にも行かない。
「――フレイザー、クライフ」
フレイザー達はその場でレオアリスの指示を待った。
「二人は先にアスタロトの所に行ってくれ。カイ、案内を」
「承知しました」
フレイザーとクライフが飛竜に騎乗する。
「上将は」
「俺は」
動きに気付いたのか、アスタロト達が向かい合った時と同じように、唸り声はレオアリス達の周囲を回りはじめた。
そうしてゆっくり、確実に距離を詰めてくる。
「行け」
二人は頷いて飛竜の手綱を引き、カイの後について雪の止んだ空に駆け上がった。
飛び立つ飛竜を追って、唸り声が方向を変える。
がさり、と何か大きなものが樹々を揺らす音がした。
右斜め前方の、二間ほど先だ。
針のような葉を持つ黒々とした常緑樹の上に、白い塊が駆け上がった。
形だけなら、少し毛足の長い、猫科の大型獣に見える。
跳躍すれば、飛竜にまだ届くか。
「それも困る」
レオアリスは唸り声の方向へ踏み込み、鳩尾に手を当てた。
右手が沈む。
一瞬で――この雪の世界よりも更に、身を凍り付かせる空気が流れ、辺りを支配した。
白い獣は跳躍しようと撓(たわ)めていた身体をぴたりと止め、振り返った。
爛々と光る両眼が樹上から気配の先を睨み付ける。
気配の中心に現れた、冴えた白刃。
剣から零れ落ちた青白い光が、雪と樹々を照らし、獣の両眼を弾いた。
引き抜いた剣を右手に提げ、獣へと踏み出そうとして――、レオアリスはふと視線を落とした。
手の中の剣。雪に映える青い光。
「――」
思い起こされるのは――あの時――
たった三ヶ月ほど前、この森でバインドと対峙した、あの時だ。
剣も覚えているのか、数度激しく明滅した。
黒森もまた、ざわりと身を揺する。
奇妙な感覚が沸き起こる。

目の前にいるのは黒森の獣ではなく、あの炎を纏う剣を持つ剣士なのではないか――
今立っている場所を、忘れそうになる。
レオアリスは押さえ込むように眼を閉じた。
「上将？」
立ち竦むように俯き、剣に視線を落としているレオアリスの姿は、ロットバルトの中にもあの時のヒヤリとした感覚を甦らせた。
レオアリスの身を包む空気が、普段より凍てついているように感じられる。
獣は恐れ、じり、と樹上で後退った。
レオアリスを包む青白い光が、雪の中で不安定に揺れる。
（不味い――まだ配慮すべきだったか）
この場所は、条件が揃い過ぎている。
「――上」
ロットバルトが近寄りかけた時、呪縛が解けたかのようにレオアリスが身動ぎした。
伏せていた面を上げる。そこには恐れていた色は無い。
「――大丈夫だ」
沸き上がった感覚はやけに明瞭だったが――
「問題ない」
レオアリスははっきりとそう告げた。
まだ過去の記憶にはしきれない情景の中で、感情が揺れただけだ。
レオアリスは再び、獣と向かい合った。
視線の先にあるのは、樹上で自分を見据える、白い獣。
獣は彫像のように止まったまま、そこに何がいるのか見極めようと、じっと樹上に蹲って光る瞳を向けた。
恐れ――野生の獣が本能で捉える抗（あらが）い難い恐怖、警告を、それ（・・）も確かに感じていた。
そして目の前にある存在を恐れていながら、それは逃げ出す事をしなかった。
身を縛る恐怖を打ち払うように、それは腹の底から搾り出すような咆哮を上げた。
風が起こる。
眠っていた吹雪が呼び起こされ、吹き荒れ、樹々を揺さぶり叩きつける。
「やっぱり、この吹雪はお前の仕業か」
吹雪を呼んでいたのは、この咆哮――、この魔物だ。
獣は樹上から跳ね、雪煙を上げてレオアリスの前に降り立った。
身体は見上げるほど大きい。
四つ足をついた肩の辺りまで、レオアリスの身長の二倍はあるだろうか。
近くで見れば長い毛は純白ではなく、所々に青い筋の入った僅かに灰色がかった斑の毛並み。
前脚には鋭い三本の爪が伸び、一つ一つが刃物のようだ。
牙の並ぶ赤い口。
燃える氷のような、輝く緑の双眸。
しなやかな肉食獣独特の体躯は、暫し見惚れるような美しさがあった。
「綺麗な獣だな。――ここらはお前の狩場か？」
問いかけに対する肯定か、苛立ちか、遠くで響く雷鳴の如く、獣は低く喉を鳴らして牙を剥き出した。
吐き出す息がレオアリスの漆黒の髪を揺らす。
獣はレオアリスの頭を噛み砕こうというように顎（あぎと）を開き、吼えた。
甲高い咆哮が走り、吹雪が荒れ狂う。
吹き付ける雪の一粒一粒が剣の纏う光を受けて散り、青く染まった幻想的な光景が生まれる。
激しい風の中で、レオアリスは獣を見つめた。

「――」
獣の瞳が見える。
ひたとレオアリスに据えられた、緑の瞳。
意識を突き通すような色だ。
そこにある獣の意志が読み取れる気がした。
「上将！」
声がかかり、はっとしてレオアリスは瞬いた。
ロットバルトの声は、斬るか、退くか――、どちらを選択するのかと疑問を含んでいる。
退くには早い。
クライフ達がアスタロトの所に辿り着き、二人を救出するまでにはまだ時間があるだろう。せめて四半刻、この場で保たせたい。
だが、斬るには。
風圧が来る。飛び退いた足元を、鋭い爪を持つ前脚が撃った。
視界を通り過ぎた爪は想像以上に切れそうだ。
「難しいかな」
獣は待つ気など無いだろう。
レオアリスは獣の懐に踏み込み、だが剣を振る事なく右手へと跳んで距離を取った。
獣が向きを変え、再び前脚を振り下ろす。
それを躱し、もう一度踏み込んで、退く。
ロットバルトはその状況に眉を寄せた。
「引き付ける――いや……、引き離すのか」
レオアリスはどうやら、獣をこの場――アスタロト達のいる方向から引き離そうとしている。退く訳でもなく、斬るつもりも無いのだ。
しかし獣も簡単にレオアリスを追い掛けては来ない。
前脚は伸ばすが、それ以上踏み込もうとはしなかった。
そして時折、背後を気にして苛立っている。
少し離れた場所から見ていると、それははっきりと判った。
（あの位置から動きたがらない――という事は、あの獣の意思が侵入者を阻む事にあるだけではなく、自分が動きたくない……何かから離れたくない理由があるのか）
クライフ達が向かっている事も、その理由の一つかもしれない。
（時間を稼げばいいのかもしれないが――）
それよりも、拙速な手段ではあるが、斬る方が早い。それで今回の問題は十中八九解消される。
シュランへの道を閉ざしているのはほぼ間違いなく、あの獣だ。
問題の解決――閉ざされたシュランへの道を開くだけなら、それでいい。
ただレオアリスは、何か考えがあるのだ。
単純に斬って良しとしないのは、剣士でありながらも――レオアリスらしい。
（しかし、今の状況では四半刻も引き止めるのは難しそうだ）
「上将、動きを封じる事は」
倒しはしないまでも、脚の一本も動かなくする事は容易いだろう。
「そう、……いや」
それはレオアリスも判っているようだが、やはり迷いを見せた。
野生の獣が片足といえども自由を無くせば、意味する所は死と大差ない。
ロットバルトの見て取った通り、レオアリスには獣を傷付けたくないという思いが強かった。
剣を振る事を躊躇させるのは、獣の眼の色だ。
必死さと、決意――
それから、あの瞳を見た時から感じていたのは。
目の前の侵入者が中々立ち去らない事に、獣は苛立ち、激しい咆哮を上げた。
「そう怒るなよ」
呟いてから、ああ、やはりそれだ、と思った。

いや、怒るというより、もう少し違うか。
思わず、もう邪魔はしないから、と獣の望み通り立ち去ってしまいたくなるような。
「そういう訳にもいかねぇんだけ、ど？」
襲い来る爪を避けて飛び退き、着地した瞬間――、足元が唐突に陥没した。
「何だ！？」
体勢が崩れる。
足元に走らせた視線の先で、積もっていた雪が地面に吸い込まれ、黒い亀裂が口を開けるのが見えた。
「やべぇ」
アスタロトが落ちたのと同じような亀裂だと、咄嗟に理解した。
が、体勢の立て直しようがない。
「上将！」
駆け寄ったロットバルトが腕を伸ばす。
獣は後ろ脚で立ち上がり、鋭い爪を持つ両腕を開いた。

獣は暫く唸り声を上げながら、落ちた侵入者を追って亀裂に鼻面を差し入れようとしていたが、やがて諦めて頭を上げた。
雪の上に落ちた赤い血の滴をじっと眺める。
それから、長々と吼えた。
激しく吹き付けていた吹雪は瞬く間に勢いを弱め、黒森は何事も無かったかのように、白い地表と黒々とした空の間に横たわっている。
獣は一度、ぐらりと身体をよろめかせ、それから足元の亀裂を睨むと頭を真っ直ぐ持ち上げ、森の中に消えた。

## 九

アスタロトは亀裂の中に飛び降りるなり、アーシアに駆け寄って抱き締めた。確かな感触にほうっと息を吐く。
「アーシア、大丈夫？　怪我はない？」
「アスタロト様」
額を当てて心配そうに自分を覗き込んでくるアスタロトの様子を見て、アーシアはほんの少し辛そうに眉を寄せ、アスタロトの腕に手を置いて向かい合った。
「僕は大丈夫です。――何で降りてきてしまったんですか」
「何言ってるの、当たり前じゃん。アーシアを一人でこんな所に置けるか」
「アスタロト様」
それじゃ違うんです、と言おうとして、アーシアは俯いた。
アスタロトを守りたいと、何より強く思っているのに――どうしていつもこうなのだろう。
もっと強ければ、さっきだってあの獣を、アスタロトではなくアーシアが追い払えたはずだ。
レオアリスだったら、何の問題もなくアスタロトを守れる。
（剣も使えないし、僕には強い牙もない）
「心配する事ないよ、アーシアは私が守るから」
そうではないのだとは言えず、アーシアはただ笑みを浮かべた。
「それにしても、本当にあったかいよね、ここ。外より全然いいや」
「――そうですね。不思議です。外はあんなに雪が降ってて凍ってしまいそうだったのに」
ぽう、と暗闇に明かりが差し、隣を見るとアスタロトが手のひらに炎を灯したところだった。
ゆらゆらと揺らぐ炎の光に、アスタロトの綺麗な顔が浮かぶ。
こんな状況なのに、瞳に踊る炎はきらきら光っている。

「見て、奥に続いてるよ。洞窟の途中みたいだね」
アスタロトは左右に炎を揺らしてみせた。灯りの先で、狭くなったり広くなったりしながら、この地下の空間は左右に伸びている。
「――」
暗がりと、その奥に溶けるような洞窟を見て、アーシアはクスリと笑った。
「どうしたの？」
「いえ――森の下の洞窟って、懐かしいというか……あの時はもう、こんな事は二度と無いと思ってましたけど」
アスタロトは不思議そうな顔をした。
（そうか、アスタロト様は知らないんだ）
黒竜と共に地中に落ちたアスタロトを助ける為に、レオアリスと一緒に地下の坑道を降りた。
あの時の不安と、今とは全く違う。
今はアスタロトは隣にいる。
自然と、両手が拳を作る。
（良し――）
傍にいるのだから、力不足だとか何とか、嘆いている場合ではない。
あの時と同じ――、自分ができる事をするのだ。
「アーシア、出口を探そうよ。探検しながら行こ」
アスタロトはアーシアに手を差し伸べた。
「探検しながらって、」
ここを動かない方がいいのじゃないか、とも思ったが、アスタロトは屈託なく笑っていて、その上今のアーシアは前向きな気分だった。
「あったかければ大丈夫、何が来ても全然平気。私がアーシアを守ってあげるから」
「――僕が、アスタロト様をお守りしますよ」
アスタロトはアーシアを見つめ、嬉しそうに頷いて彼の手を握った。

「おぉおお～ぅ、いねぇ！　カイ、マジでここだったんだな？！」
つい四半刻前までアスタロト達がいた場所に降り立ち、クライフはカイを振り返った。
カイが心外そうに頷く。
場所は間違い無くここのようだが、アスタロトとアーシアの姿は見当たらなかった。
「ひゃ～、どこ行ったんだ～」
右、左と顔を向ける。
「クライフ！　どう？！」
頭上の亀裂からフレイザーの声が降ってくる。垂らした縄が一緒に揺らされた。アスタロト達を引き上げる為に樹の幹に括り付けたものだ。
「いねぇ！　移動してる！」
クライフの返事を聞き、フレイザーは驚いて亀裂を覗き込むように両手を付いた。
「嘘ォ！」
「う」と「そ」の間に小さい「っ」が入った発音だったが、アスタロトがじっとしていないのは充分納得できる。
フレイザーは溜息と共に額に手を当てた。
「困った方ねぇ……カイにまた探してもらう？　それとも上将に報告が先かしら」
「アスタロト様達を先に見つけた方が安心じゃねぇ？　報告の間にどんどん遠ざかっちまいそうな勢いだぜ」
「そうね――。そうしましょう、クライフ、貴方も一旦上がって……」
フレイザーの声が途切れ、クライフは亀裂を見上げた。
「フレイザー？　どうかしたか？」
クライフの声が洞窟内に反響し、遅れて、獣の咆哮が壁に跳ね返りながら落ちてくる。ぎょっとしてクライフは声を張り上げた。

「フレイザー！」
「ねぇ、また雪が止んだわ」
フレイザーが身体を起こしたのか声が一旦遠退き、またはっきりと亀裂を通って届いた。
「近付いて来る！」
クライフは頭上を睨み付けた。
確かに、再び、今度はもっとはっきりと、咆哮が洞窟の中にも反響している。
「上将は――」
何故また近付いて来ているのか。
レオアリスは。
「大丈夫に決まってる！」
叫んでクライフは縄を掴んだ。
「くっそ、ロットバルト、あいつ何やってやがんだ」
レオアリスに付いていながら、取りこぼすとは。
「いや、言ってもしょうがねぇ」
とにかく、状況が判らない以上、地上はまずい。
「――フレイザー、降りてこい！　状況確認するまで中にいた方がいい！」
「判った！」
フレイザーは辺りを見回し、縄がしっかり樹の幹に巻き付いているのを確かめてから、最後に飛竜に上空へ退避するように指示した。
二騎の黒鱗は近付いて来る咆哮に興奮した様子ながらも、フレイザーの指示通り雪の止んだ空へ飛び立つ。
咆哮はどんどん近付いて来る。後方の樹々が揺れた。
フレイザーは亀裂に向かって叫んだ。
「降りるわ！　どいてて！」
抱き止めちゃおっかなー、と思っていたクライフは、さすがに諦めて広げかけた両手を収め、壁際に退いた。
縄を伝うようにしてフレイザーがひらりと降り立つ。
「上は？」
「まだ姿は――」
言い終わらない内に、一際大きな吼え声が響き、洞窟内を震わせた。
まるで鐘の中に頭を突っ込んだまま叩き鳴らされているようだ。
思わず二人とも耳を押さえ、張り詰めた顔を上げた。
声は亀裂から落ちてくる――真上だ。
硬いものが、地面を掘り返そうとしている音が聞こえる。
遠慮の欠片も無い爪音と唸り声。
雪と土、削り取られた岩の欠片がばらばらと落ちてきて、クライフ達は二、三歩後退った。
「――」
クライフもフレイザーも剣の柄に手を掛け、息を詰めてじっと頭上を見つめていた。
ガリッ、ガリッ、ガリッ、ガリッ、ガリッ……
すぐにでも、あの白い獣が亀裂から首を突っ込むのではないかと思えたが――、やがて音は止まった。
少しの間低い唸り声だけが続いていたものの、それも次第に遠退いていった。

# 十

ぴちゃん、と雫が頬を叩いた。
冷たい雫が頬を伝い、レオアリスは瞼を開け、瞬きを繰り返した。
「――？」
どこだろう。暗い。
けれど、周囲は暖かかった。火を焚いた室内にいるような感じだ。
その暖かさのせいで、一瞬何があったのか思い出せなかったが、再び落ちて来た冷たい雫が頬に当たり、すぐに思考も晴れた。
「落ちたのか……」
ゴツゴツした岩肌の地面に打ち付けたのか、背中が鈍い痛みを訴えている。暫く気を失っていたようだ。
頭上から時折、湿った音を立てて雪の塊と雫が落ちてくる。
暗くて見通せないが、多分天井に亀裂があるのだろう。雪で覆われていたそれを踏み抜いてしまったのだ。
辺りを見回そうとして身体にかかる重みに気付き、レオアリスは眼を凝らした。
暗闇に慣れてきた眼に、金の髪が一番に映る。頭をレオアリスの胸に置くようにして、うつ伏せに倒れている。
「ロットバルト――。二人して落ちた――って言うより、俺が巻き込んだのか。しまったな」
自分の手をロットバルトが掴んだのは覚えている。
という事は、ハヤテ達だけ上に取り残された事になるが、自分が落ちた以上、ロットバルトがあの場に残らなかったのは都合が良かったかもしれない。
「俺が一番に退場してどうすんだよなぁ」
周りはいい迷惑だ、と軽く自己嫌悪を覚えながら上体を起こすと、ロットバルトの身体は何の反応も返さずに崩れた。
束の間、レオアリスはただ訝しそうにロットバルトを眺めた。
「――ロットバルト？」
まだ意識が戻っていないのかと揺り起こそうとして、肩に置いた手がぬるりと滑る。
灯りが無い場所でも、その感触の正体は判った。
血だ。
一瞬、息が止まった。
目の前に閃いた爪――
すうっと血の気が引き、胃の辺りが凍る。
「――おい」
抱え起こそうとしても、まるで人形のような反応が返る。
暖かかった空気が、一気に冷え込んだ気がした。
「……ロットバルト！　しっかりしろ！」
ぼんやりとした視界では、傷の具合さえ良く見えない。
左肩か背中だ。
（左――）
左は、心臓がある。
もし、深ければ――
深ければ、何だ。
暗くて見えにくく、苛立ちが募る。手を付いて傷口を覗き込もうとした時、漸く反応が返った。
「っ……」
「ロットバルト！」
急き込むように呼び掛けると、うっすらと眼を開けた。
「……ああ、」
目の前のレオアリスを認め、それから視線を辺りに向ける。傷が痛むのか、眉を潜めた。
「ここは？」
どっと安堵の波が打ち寄せ、レオアリスはすとんと腰を降ろした。
「良かった……」

「――」
肘をついて起き上がりかけたロットバルトの肩を、慌てて押さえる。
「無理に動くな。傷が開く」
「問題ありません、かすり傷です」
「かすり傷って――見てみないとどんな状態か判らないだろ。深かったら」
「そうですね……左肩はまあ、充分動く。厚着をしていたお陰で助かった。皮膚を裂かれたくらいで、筋肉が切断されるまでには至っていないでしょう」
平然といつも通りの口振りでそう言われると、少し焦り過ぎだったような気になる。
ただ、手を濡らした血の感覚は本物だ。傷口を改めるまでは安心もできなかった。
「とにかく、手当てを――」
とは言ってみても、こんな場所っは血止めも満足にできない。その事にレオアリスは少し苛立った声を出した。
「治癒でも使えればいいんだが、覚えてねぇし――、悪いな」
「いや、安心しました。我々は応急措置の道具を常備してますよ。そこら辺に鞄が落ちていれば」
「――」
安心したって何だ、と思いはしたが取り敢えず突っ込まず、レオアリスは周りを探した。
近衛師団に限らず、隊士達は負傷時の為に薬草や包帯などを常備している。隊から付与される基本装備という奴だ。
持っていないのは、レオアリスくらいだろう。
「鞄……、ああもうホント暗いな、灯りがありゃいいのに」
「鞄の中に、携帯用の手灯がありますが」
「いや、その鞄を探してるんだっつーの」
手探りで周囲をあちこち探し、漸く少し先に白っぽい固まりが落ちているのを見つけた。駆け寄って拾い上げる。
「ああ、あった。セドナもあるな、良かった」
セドナは薬草をすりつぶした塗布薬で外傷に良く効き、軍では重宝されている。
レオアリスは戻って火口箱で手灯の小さな芯に火を灯し、手当て用の品を広げた。
塗り薬、痛み止め、包帯、消毒用の酒、縫い針、糸。
「充実してるな……つうか、どっちかっつーとこれは放任じゃねぇか……？」
縫い針と糸は当然、自分で傷を縫合しろという意味だ。
「常に法術士が近くにいるとは限りませんからね。大体、そういう意味では一番放任されてるのは貴方ですよ。こうした物も持たされていない」
「俺はまあ、貰うのは意味無いから中身見る前に断ってるしな。自己修復するし」
ゆら、ゆら、と手灯の硝子の中で炎が揺れる。
手のひらに乗る程度の造りの小さな灯りだが、手元を照らすには充分役に立ち、今のこの状況では非常に有難い。
「とにかく、ここが暖かくて良かったよ。あの冷気の中で傷の手当てじゃやかなり厳しいからな。凍らないように気合いが要るぜ」
「気合いで済むなら幾らでも済ませますが」
ロットバルトはレオアリスの口振りに苦笑を浮かべ、それから詫びた。
「お手数を掛けて申し訳ありません」
「――何でお前が謝るんだ」
返事にはどことなく怒ったような響きがあり、ロットバルトは不思議そうに暗がりのレオアリスの顔へ視線を向けた。
その表情がはっきり見えていたら、レオアリスは今度こそ本気で怒っていたところだが、幸いというか傷の方に集中していた。
「傷は、まだ乾いてないな」
傷口が乾いていたら、張り付いた布を剥がすという余り有り難くない

事をしなければならない。
レオアリスは傷を改め、ほっと息を吐くと同時に眉を寄せた。
「確かに傷は浅い」
口に出してはそう言ったが、傷は肩口から背中の半ばまで渡っている。
「クライフ達と合流したら、もう少しきちんと手当てしよう。セドナが足りない。せめて痛み止めを飲んでおけよ」
消毒用の酒で傷口を洗い、血を拭い、薬をつけて包帯を巻く。
レオアリスが手早く応急措置を施すのに任せながら、ロットバルトは瞳を細めて頭上を見上げた。
「傷が浅いのは外套のお陰だけでも無いでしょうね。落ちる寸前、あの獣は攻撃の手を止めたように思えましたが」
「そうなのか？」
「だから斬らなかったのでは？」
それは――そうだ。
そもそも『彼』、もしくは『彼女』には、敵意は感じられても害意は無かった。
それに、もう一つ。
剣を振らなかった一番の理由。
「……あの獣は、弱ってるように見えた――。多分、だけどな」
「弱っている？」
さすがにロットバルトには充分脅威に思えたが、レオアリスがそう感じたのであれば何か原因があるのだろう。
「成る程、それでですか」
決して、非難する響きではない。
けれどレオアリスが束の間黙ったのは、自分の取った行動が正しかったのか、迷いが生じていたせいだ。
レオアリス自身には何の問題もない。
だが、怪我をさせてしまった。
自分が平気だと思っても、周りはこうして傷を負う。
自分一人平気では意味がない。
「部下が上官を守るのは当然です。気になさる事はありません」
ロットバルトは完全にレオアリスの思考を読み取ってそう言ったが、そういう問題ではないのはレオアリスにも判っている。
あの場にクライフとフレイザーがいなかったのは、せめてもの救いだ。
いや、あの場に、例えば――、師団の部隊がいなかったのが。
指揮官が中途半端な行動を取って、今回のような状況に陥（おちい）った時、現場に残るのは、混乱だけだ。
放り出された部隊の被害を考えると身が縮む。
応急措置を終え、レオアリスは膝を付いたまま身体を起こした。
手灯の炎を吹き消す。油もそれほど多くはない、ずっと点けていたら一刻もしないで切れてしまうから、必要な時だけだ。
灯りが消えると、辺りは最初よりもより一層暗くなった。
「とにかく、俺を庇う事なんて無い。俺の方が治癒力は高いからな」
「ああいう場面で、この相手は治癒力が高いからただ見ていればいい、と悠長に判断する方が難しいと思いますが」
「いや、そうだけど」
「それに、落ちたのは貴方が先ですからね、お蔭で骨を折らずに済んだ。それより、ここは？」
ロットバルトは改めて周囲を囲む岩の壁を見回した。
「地下の洞窟みたいだな。アスタロト達もこれと同じような所に落ちたんだろう。上に亀裂があるけど……この壁を登るのは難しそうだ」
「暖かいのは、地熱のせいですか……」
「ああ、そうか」
気が動転していたせいか、そこまで考えが回らなかった。
元々温泉が湧く土地だ、洞窟の中にも温泉が湧いているのか、場所が近いのか、湧き出す湯の熱で空気が暖められているのだ。

地面に亀裂があり、緩くなっていた雪を踏み抜いたのだろう。
それにしても本当に暖かい。少し蒸すくらいで、先ほどまでの吹雪の中とは雲泥の差だ。
これならアスタロト達も却って助かっただろうと思うと、少しだけ力が抜けた。
「にしても、ここだけ、春みたいだな……」
黒森の下に、こんな場所があるとは思いも寄らなかった。
たかが十数年住んだだけでは黒森の事を知り切れず、自分はやはり、まだ物を知らない。
ロットバルトは右肩を壁に預けるようにして、息をついた。傷の痛みにか、少し鬱陶しそうに眉を顰める。
「飛竜が、どうなったか気になりますね」
「もう上にあの獣の気配は感じない。ハヤテ達は飛べるからな――大丈夫だろう。一番の問題は、あの獣がクライフ達に追い付くかどうかだ。間に合ってくれてればいいんだが」
「それなりの時間引き付けていましたから、五分五分というところか――。ただカイが案内している分、方向を間違う事はないでしょう。それより、あの獣は何かを守っているように感じましたが」
「多分」
レオアリスは頷いた。
野生の獣が生命の危険を感じながら退かない理由は、ほぼそれだ。
「守るとしたら、一番は子供か――。例えば、近くに巣があるとか……」
「――」
巣。
レオアリスとロットバルトは同時に顔を見合わせた。
近くに巣があるとすれば、可能性は。
というか、ここは。
「あはは」
笑っている場合ではない。ロットバルトが溜息を吐く。
「――また面倒な事になりましたね。しかし、この中も広そうだ、そうそう遭遇するとも限らない。それよりあの大きさの獣が巣にしているなら恐らく一つか複数か、他にそれなりの開口部があるはずです」
「ああ」
風がある。上からではなく、上に逃れるように吹いている。という事は、やはり別の開口部があるのだ。
「出口を探そう――意外とアスタロト達の落ちた場所に繋がってるかもな」
「その可能性は高いですね。まあ今回大分混乱していますが、繋がっていれば今後の行程が随分楽になる」
日頃弱音とはほど遠い所にいるこの参謀官も、さすがに「早いところ村に着いて落ち着きたい」位は思っているに違いない。
そもそも本来なら、ロットバルトはこの状況と無縁でいられたはずなのだから。
（……悪い事したなぁ……）
まじまじとそう思った。
「急ごう。まずは出口を確保して――いや、それよりアスタロト達を見つけるのが先か。合流して外出てハヤテ達を拾って、やる事が一杯ある。……何しに来たんだろうな」
温泉に浸かりに、というのどかな目的は、もはや遠い過去の話のようだ。今の目的はそれこそ生還という二文字で、あまり笑えない。
「まあ、仕方ないでしょう、そもそも――」
ロットバルトは立ち上がり、面には表わさないものの、一瞬動きを止めた。
「傷が痛むのか？」
と尋ねて、何を当たり前の事を、と眉をしかめる。
背中の筋肉は身体を動かす時に必ず使うものだ。浅いとは言え背中の中程まで三筋の傷が渡っていれば、痛まない訳が無い。
（俺が剣士だから）

痛みが――判らないだろうか。
少なくとも、配慮が足りないのは事実だ。
「動くのは少し待つか。座ってろよ」
ロットバルトは束の間レオアリスの顔を見つめ、その瞳に少し、不思議な色を浮かべた。
「……いえ、待っていただく程ではありません。申し訳ないが先に行ってください。ここなら凍える心配もない、暫く休んで後から追いかけます」
「置いて行く訳ないだろ」
レオアリスは心外そうにそう言った。
「ここがどこだかも判らないし、第一怪我人を」
「怪我を負っているからこそですよ。ここで時間を費やすのは無駄ですし、とは言え私も通常通り動ける自信は正直ありません。足手まといになるのは本意では無いのでね」
「足手まといとか、そんな事は思ってない」
レオアリスは強く言い切ったが、ロットバルトの考え方は違うようで、仕切り直すように改めてレオアリスに向き直った。
「確かに足手まといと言うのは語弊がありますね――。要はこの先何があるか判らない状況で、私が満足に動けなければ、どこかで必ず貴方に負担が生じるでしょう。任務放棄のようで気が引けますが、これ以上事態が遅滞するのは私としとも避けたいところです」
「そりゃ――」
確かにのんびりしていられる状況とは言えない。
今の怪我では歩くのも厳しい事は判るし、レオアリスにしたところで無理に動かせたいとは思っていない。
ただだから置いて行く、というのは納得が行かず、レオアリスはその気持ちを代弁するように腰に手を当てた。
任務放棄などとは当然、思わないが。
「やっぱり少し違うんじゃないか」
「この状況を考えれば、普通の選択でしょう」
随分あっさりとした言い方だ。
（普通？）
「……じゃあ聞くが、俺が怪我してる立場なら、お前はちゃんと先に行くんだな？」
その言葉には、冗談でも聞いているかのような可笑しそうな笑みが返った。
「それは全く条件が違う。引き合いに出す話にはなりませんよ」
「ならないって――」
「貴方は大将でしょう」
レオアリスは一度黙り、息を吐いた。
「――大将だから部下を見捨てても良くて、その逆は有り得ないって？」
「そうです」
思わずまじまじとロットバルトの顔を見つめる。
「何、言ってるんだ」
「貴方は先ほどこの怪我を気にされたが、本来は気にされる必要が無い事柄です。その結果、無駄に事態を遅らせる事になりかねない」
「――本気で言ってるのか？」
無駄、とか――
「まあ、さすがに今の状況には大げさな言い方ですが、軍という組織の在り方を考えた時、向き合わざるを得ないものですよ」
むっとしてレオアリスはロットバルトを睨んだ。
「……違うだろ。それは組織としてそういう考え方もあるかもしれないけど、この場合とは」
「違いませんよ。事の大小はあれ、根本は同じです。例えば、そうだな……、今この場が戦場だと仮定して、私が今以上に重傷を負っていたとしても、戦局が収束しない限り貴方は留まるべきではない。それが将たる者の務めです」

「――」
腹が、立った。ものすごく。
ロットバルトが言っているのは、突き詰めてしまえば――切り捨てろと、そういう事だ。
「怪我人じゃなければ、ぶん殴ってるぞ」
「感情論を申し上げている訳ではありません」
全く必要の無い観点だ、と言われているような気がして、レオアリスは黙り込んだ。
その様子に気付いているのかいないのか、ロットバルトは淡々と続けた。
「何を優先すべきかです。今はこうして話をしている余裕がありますが、状況によっては決断を迷う事そのものが部隊の命取りになりかねない」
「――」
余りに正論で、言葉が出ない。
でも、それは納得が行かない。
ただ上手い言葉が見つからず、悔しさ混じりに溜息を吐いた。
「もういい。今結論が出る内容じゃないしな――。とにかく周りを見てくるから、そこから動くなよ」
「上将」
議論を逃げるつもりでは無かったが、ロットバルトの呼び止める声を背に、レオアリスは風の流れてくる方へと歩き出した。
少し歩くとそれだけで、元いた場所は闇に覆われてしまう。ロットバルトの姿が見えなくなって、それまで喉の辺りまで溜め込んでいた言葉を口にした。
「何なんだっ！」
あの言い方は。
ついつい足取りも荒くなる。
「感情論か？！　俺が感情的なんじゃなくて、あいつが合理的過ぎるんじゃないのか？！　全部が全部、そうやって割り切れりゃ苦労ねぇってんだ！」
感情的で悪かったなぁ！　と思う。
その辺で取り敢えず落ち着いてきて、一息ついた。
落ち着けば確かに、自分は感情的なのだと、これまた思わざるを得ない。
要は論破できていないのだから。
「論破は……まあ、置いといて」
レオアリスは誰もいないのに視線を逸らした。
しかし大事なのだから感情的になるのが当然だ。
どちらがより大事か、そんな事に優先順位を付けなくてはいけないのか。
（判る。判るけど――）
確かに、そうした判断を軽視する訳にはいかない。
例えば戦場では、一を手放して十を――いや、二を救う事を選ばなければいけない状況はあるだろう。
どんなに苦しい判断でも、その場合、判断を下す責任は、大将であるレオアリスにある。
今の状況を招いたのも、自分の判断が甘かったせいではあるが。
けれど――
（こんな事で腹が立つのは俺だけか？）
理解していないからか。
こんな状況でさえその判断ができないようなら、いざという時判断などできないだろうか。
いや――
違う。
アスタロトなどはレオアリス以上に、まさしく烈火の如く怒るだろう。
そもそもロットバルトの意見は正しいが、唯一の正解ではないはずだ。
第一に、例え手放す選択をするにしても、それは考えて考えて考えて――、考え抜いた結果だ。

時間が無いなら無い中で、考え抜いた上での選択であるべきだ。
あんなに簡単に天秤にかけられる問題ではない。
「――」
ふっと風が頬を撫で、レオアリスは顔を上げて辺りを見回した。
少し冷えた空気と暖かい空気が入り交じっている。
（空気が出入りする開口部があるのは確実みたいだな……）
レオアリスは鳩尾に手を当て、剣を引き抜いた。
青白い光が洞窟内を照らし出す。
洞窟はゴツゴツと荒れた岩肌を見せながら曲がりくねって続いていて、剣の光が届く範囲より先は前も後ろも暗がりが詰まって先を伺わせない。
「ん？」
前方の暗がりが広がった気がして剣を持ち上げると、道の先が二股に別れているせいだった。
レオアリスは一旦立ち止まって周りを見回した。
別れ道は厄介だ。この先、出口に繋がっているかどうかも確実ではない。
（あんまり歩き回るより、カイを呼び戻して一旦状況を聞いた方がいいな）
クライフ達がアスタロト達と無事合流できたか、それも気になる。
「――カ」
カイを呼び戻そうと声を上げかけた時、わん、と洞窟の岩壁が鳴った。
いや、鳴ったのではなく、咆哮が轟いたのだ。壁に反響し、空気を震わせる。
「！」
あの獣だ。
再び戻って来たのか――今度の咆哮は、洞窟の中で響いた。
前後に視線を走らせる。壁に反響しているせいで、どちらから響いて来ているのか判らない。
冷たい空気が交じり出しているのは前方で、そうなると出口――獣が近付いてくるのは前方からの可能性が高いが。
「――」
レオアリスは地面を蹴り、洞窟を走り出した。

## 十一

アーシアは歩きながら辺りを見回した。アスタロトの創り出した炎が彼等の頭上に浮かびながらずっと付いて来て、洞窟内は充分に明るい。
自分達を取り囲む土と岩の壁が湿っているのも見て取れた。こもった湿度のせいだ。時折水滴も落ちる様が見れる。
「アスタロト様、さっきよりも温かくなってきましたね。少し蒸し暑いくらいですけど、大丈夫ですか？」
「うん、平気。でも外に向わないで奥に来ちゃったかな、失敗したなぁ」
レオアリスが怒るだろうな、と大抵いつも、事態がある程度進行してから思うのだが。
行動に移す時は余りそういうのは関係が無い。
「カイがいてくれたら良かったんだけどねー。私も伝令使持とうかなぁ」
「そうですね。でもそう言えば、アスタロト様は転移の術を使えるじゃあないですか。それで簡単に外に出れるんじゃありませんか？」
昔、地中に閉じ込められ生死の境に置かれた事のあるアスタロトは、その事を教訓に転移の法術を学び、身に付けていた。
しかしアスタロトはあっさり首を振った。
「ムリムリ。そんなどこでも行けるほど高位じゃないもん。素人には行き先が良く知ってる場所じゃないと難しいの。右に何があって、左に何があってって、ちゃんと思い描くんだよ。私がまともに行けるのなんて王都の一部くらいだよね」
「そうなんですか」
アーシアは感心と納得の入り交じった声を出した。
「上の森なんて、どこもかしこも同じような見た目でわかんないし」
アスタロトもアーシアも、自分達だけ王都に戻るという発想はこれっぽっちも無いから、この話題はそこで終わりだ。
「カイも全く初めての場所には跳べないし、知らない人は探せないって言ってたよ。レオアリスが知ってるか、カイが知ってるか、どっちかじゃないと駄目なんだって。とにかく、そのうち外に出られるよ。こうやってね、左手を壁に当てて歩いてるといいんだって聞いたことある」
やがて出口に辿り着くまで、どれだけ時間が掛かるのかは判らないが。
しかし当面、アスタロトには無視し難い問題があった。
ぐぐう、とお腹が鳴る。洞窟内では良く響いた。
暖かい場所に来た事で身体はすっかり安心し、本能に忠実に従っていた。
「うう――お腹空いたぁ」
アスタロトは俯きがちに溜息を落とした。昼食を食べたのはもう六刻は前で、すっかりお腹はぺったんこだ。
「はぁ、ホントなら今頃、宿で美味しいご飯食べてたのになぁ……何が出たかなぁ」
それを見て、アーシアがにこりと笑みを向ける。
「お菓子がありますよ。待ってくださいね」
「ホント？！　エライ、アーシア」
アーシアは背負っていた鞄を下ろし、中から更に袋に入ったお菓子を取り出した。
宿でお茶を淹れた時に出そうと思っていた焼き菓子だ。館の菓子職人が作って持たせてくれた。
「あとは果物と――ちゃんと全員分ありますから」
アスタロトが遠慮しないよう先回りしてそう言うと、アスタロトはキラキラと嬉しそうに瞳を輝かせた。
けれど手を伸ばして受け取る前に、ふとアスタロトは思い直して手を止めた。
アーシアが首を傾げる。
「アスタロト様？　どうかしましたか？」
「――やっぱりいいや、我慢する。皆食べてないのは同じだし、私だけ食べたら悪いもんな」
アスタロトは苦汁に眉を寄せながらも、きっぱりそう言って首を振っ

た。
　こうなった責任は、アスタロト自身強く感じている。
「――判りました」
　アーシアはアスタロトを見つめたが、無理に勧める事はなくにっこりと笑ってまたお菓子をしまい込んだ。代わりに水筒を取り出す。
「せめてお水だけでも」
「うん、ありがとう」
　アーシアから水筒を受け取り、一口、口に含んだ。
　ふはぁ、と一息ついた時だ。
　ふいに、音が聞こえた。
　水の流れる音と――声。
　と言っても人の話し声ではなく、動物の鳴き声だ。小さな鳴き声だが、喉を鳴らして何かを呼んでいるようだった。
　アスタロトとアーシアは顔を見合せた。
「――まさか、さっきの……」
　洞窟は三間ほど先で左に大きく曲っていて、声はその先から聞こえてくる。
　アスタロトは息を殺し、足音を立てないようにしてゆっくりと曲がり角に近付き、息を潜めたままそっと覗き込んだ。
　視線が捉えた光景に、アスタロトは深紅の瞳を驚きに見開いた。
「うわぁ……」

「アスタロト様ー！　いますかー！」
　わんわんわん、と余韻を引き、クライフの声は洞窟の壁に跳ね返りながら闇の中に溶けた。
「カイ、もうちょいゆっくり行ってくれ、足元がでこぼこしてて歩きにくいからよ」
　カイは言われたとおり翼を反しクライフ達の正面まで戻ると、再び急かすように前へ進んでいく。
　レオアリス達の状況が気になるがカイには特に変わった様子は無く、無事だと、今はそう信じてクライフ達はアスタロトを追っていた。
　手灯の小さな灯りがゆらゆらと揺れる。お互いを照らすのがやっとの灯りではあるものの、暗い道を行くのに充分役立った。
「アスタロト様ー！　アーシアー！」
　フレイザーは何度か繰り返し呼んでから、前を歩くクライフに話し掛けた。
「一体どうなってるのかしらね、ここは。暖かいのはいいけど、出口はあるのかしら」
　先ほどの場所よりも湿気が増してきて、少し汗ばんだ額を押える。
　剥き出しの壁は硬い土で、所々岩や木の根が飛び出している。まさに人の手の入らない地面の下、という様相だ。
「無かったら問題よねぇ」
　と言いながらどことなくのんびりした口調なのは、この程度で動じるほど柔ではないという他に、やはりこの中が暖かいせいがあるかもしれない。
　あの吹き付ける吹雪と凍る寒さの中にいた時の緊張感は、気温の上昇と一緒に薄れている。
「けどやっぱ雪が無いのは助かるよなぁ。全然違うぜ。出口が見つかってもあんま外に出たくねぇよ。また外に出る位なら一生歩き回ってた方がマシな位だ」
　クライフが冗談めかして笑う。
「さすがにそれは冗談じゃないわ、せめて時々休みたい」
　フレイザーも笑って肩を竦め、それからクライフの背中を見つめた。
　こうしてまじまじと彼の姿を眺める事は、もしかしたら初めてかもしれない。
　身長はフレイザーより手のひら一つ分くらい高く、顔を真っ直ぐ見る

為には少し見上げなくてはいけない。
いつもふざけてばかりいるが、こうして任務の時の姿はそれなりに――、そう、それなりに見栄えがする。
フレイザーは何となく、普段の彼女とは違う、そっと抑えた声で言った。
「――クライフ、さっきはありがとう」
「何が？」
飛び降りる時抱き止めてないけどなぁ、とクライフは心の中で呟いた。やっとけば良かったとまだちょっと引きずっていたのだが、多分そんな事をしようものならフレイザーの容赦無い張り手が飛んだだろうから、仕方ない。
フレイザーはくすりと笑った。
「雪。歩き易いようにしてくれたでしょ」
「あー、ああ？！　いやぁ、ありゃその」
ばれていたのかと、顔を赤くして口籠もり、視線をあちこちに彷徨わせる。さりげなくやったつもりだったのだが。
「何つうか……」
「本当に、助かったわ」
フレイザーの声は柔らかい丸みを帯びて感じられて、引き寄せられるように振り返りかけ、クライフは咄嗟に抑えた。何となく。
「……いやまあ、役に立って良かったよ。つっても俺だけじゃなくて、ロットバルトにも手伝わせたけどな」
そう言いつつ照れ隠しに頭を掻いた。洞窟の暗がりが血の昇った顔を隠してくれてちょうどいい。
フレイザーはそんなクライフの様子に、いつもとは少し違った表情を浮かべた。
柔らかな――眩しいものを見るような。
「いっつもふざけてばかりいるけど、本当は優しいわよね、貴方って」
「え」
思わず足を止め、クライフは振り返った。フレイザーも立ち止まる。
「――そ、そうかぁ？」
「そう思うわ」
（うおー、まずい！）
平静を装ってはみたが、実際内心はめちゃくちゃ狼狽えていた。頭に血が昇り、鼓動も自分で判るほど早い。
優しい、とか、そんな事を、しかもこんなに改まってフレイザーから言われた事など、今まで無い。
（落ち着け落ち着け落ち着け――）
ふっと――、瞬間的に訪れた静寂に引かれたように、二人は暗闇の中で向き合った。
フレイザーの翡翠の瞳が、今は真っ直ぐクライフに向けられている。暗闇だってその綺麗な色は判る。
意志の強い眼差し――、けれどどこか、いつもとは違う色のような気がした。はっきりは言えないが。
「――」
改めて考えれば、今はフレイザーと二人きりだ。
こんな状況でなければ、クライフはかなり浮かれていたに違いない。
クライフとフレイザーは同期の入隊で、入隊したのは八年前――お互い十七歳、今のレオアリスの年齢の頃だった。初めて彼女を見た瞬間、好みだと思った。
フレイザーは入隊当初から周囲からの注目も高かった。今でも女が軍に入るのは珍しいが、それだけではなく、剣技も何も他より飛び抜けていたからだ。
彼女に見くびられないように、ちょっとばかり頑張ってきたのは事実だ。
いつも冗談めかして誘っては、ほとんど冗談で躱されていたし、自分自身見込みがあるとは思ってはいなかった。
それに最近になって何となく、フレイザーは好きな相手がいるのだと、

気付いてしまった。
（さすがにあの人にゃ、俺じゃ適わねぇし）
気付いてからは、なるべく諦めようとしてきたが、そう簡単に想いが変わる訳もない。
しかも、はっきりと言葉で振られた訳ではないから尚更だ。
（いっそ告ってすっぱり振られるかな）
そう心の中で呟いてみると、それはものすごく重要に思えてきた。
せめて、気持ちくらい伝えてもいいんじゃないか。
叶わなくても。
今なら――いや、今しかない。
口に出さずに後で後悔するより、本気で伝えてみて、それで振られた方がすっきりする。
（よし――）
クライフはぐっと拳を固めた。
こんな機会は今だけだ。
「その、フレイザー……、俺は」
「――何？」
フレイザーはじっと、クライフを見つめている。
クライフが言おうとしている言葉を待つように。
おそらくフレイザーも、今クライフが何を言おうとしているのか察しがついている。
そしてそれを遮ろうとする素振りは無かったから。
どくりと鼓動が鳴った。
叶わない、か――？
全く？
「――俺は」
クライフの精一杯の覚悟を遮り、突然鼓膜を突き破るような雄叫びが響いた。
「！　奴だ」
「後ろよ！」
二人は同時に暗闇の先を睨んだ。咆哮は後方から響いて来ている。
「クライフ」
「ああ、中だったな。……まずいぜこりゃ」
獣がクライフ達を追ってここまで来たのか。
「行こう。早いとこアスタロト様達を見つけねえと、このままじゃじり貧だぜ。フレイザー、灯り持って前行ってくれ」
「――判ったわ」
先ほどまでの空気はするりと消え、もう欠片も見当たらない。多分もう、あの奇跡のような時間は訪れないだろう。
ただクライフは少し、あの獣に感謝してしまった。
（あー、危なかったぜ。絶望するとこだった）
振られるのは怖い。当たり前だ。
フレイザーはそんなクライフの様子にほんの僅か物言いたげな視線を投げ――、けれど何も言わずに前を向いて歩き出した。
咆哮はもう止んでいて、しんとした静けさが戻っている。
獣がどこにいるのか、今自分達がどんな状況にあるのか、余計不安にさせられる静けさだ。
そうして暫く急ぎ足で歩いていた時、不意にカイが空中で止まり、フレイザーは思わず顔をぶつけそうになった。
「カイ？　急いで……」
言葉の途中で、フレイザーの目の前からカイの姿が消えた。
「カイ？！」
「おい……っ」
空（くう）に手を伸ばしかけ、二人は気が付いて顔を見合せた。
「ひょっとして、上将が呼んだのか」
カイがクライフ達に何の素振りも見せず消えたのは、おそらくそうい

う事なのだろう。フレイザーは頷いて胸を撫で下ろした。
「ご無事だったのね、良かった」
「ああ――本当にな」
「どうしよう、上将達と合流する？」
「って言ってもカイがいなくちゃ上将達がどこに居るかは全く判んねぇからな。カイが案内しようとしてた道をこのまま辿った方がいいと思うぜ」
「そうね、そうしましょう――待って」
歩き出そうとしたクライフをフレイザーが片手を上げて止め、人差し指を唇に宛てた。
「音がする」
クライフは口をつぐみ、耳を澄ました。
「前からだな」
先ほど咆哮が響いた後方ではなく、彼等が向かっていた前方から。
少し風が吹いていた。
「水の音だわ」
この地下に川でもあるのか、水が流れる小さな音が聞こえている。
それから、ごそごそと、何かが動き回る音。
「何だ――、まさか、もう一頭いるのか」
クライフがフレイザーの前に出ようとした時、前方の暗がりから何か黒い塊のようなものが飛び出し、二人の行く手を阻んだ。

壁に反響して洞窟内を埋め尽くしていた咆哮が消える前に、レオアリスは元いた場所に戻った。
咆哮が長く響いていたのか、少し距離があったのかはどっちもどっちだ。壁に凭れて座っていたロットバルトの姿を認め、足早に近寄る。
「ロットバルト、議論は後だ、悪いが動いてもらうぜ」
先ほどの議論を蒸し返される前に、突き付けるように口を開いた。
「俺は誰も置いて行かない」
我ながら単純な答えだとは思う。答えにもなっていないかもしれない。ロットバルトもやはりそう感じただろう。
「理想論的ですが――」
そう言った。当然の反応だ。
レオアリスは右手を差し伸べながら、悪びれずに答えた。
「そう努力するんだよ。大体理想なんて、掲げるから意味があるんだろ」
半分くらいハッタリだ。巧く論破する言葉など思いつかなかったから、ただ気持ちのままに口にしただけだ。
が、ロットバルトは一度レオアリスの顔を眺め、普段と変わらない笑みを浮かべた。
「その通りです」
「――ん？」
「この際少し楽をしようと思っていたんですが、残念だな」
嘯（うそぶ）くように笑って、差し出された手を左手で掴むと立ち上がった。
「左をあんまり」
「この通り充分動きますよ。元々擦り傷ですし、師団の薬師（くすし）が調合する薬は優秀ですしね。負傷で人員を失うより、傷薬一つに予算を注ぎ込む方が費用対効果は高いと考えているんでしょう」
「――口悪いなぁ」
レオアリスは呆れたように言って、やはりもう少しだけ追及してみた。
「……俺は結構、さっき言われた事は気にしてたんだが……あれはマジで言ってるんじゃ無かったのか」
「当然、冗談で言った訳ではありませんよ。ただし私の考えとしては、ですが」
「？　じゃあ俺の考えと違うんだろ？」

「違う事自体に問題は無いんですよ」
今回は議論を仕掛け、認識を促すにはいい機会だったというだけで、あの考え方一つを押しつけるつもりは、実はロットバルトにも無い。
レオアリスの出す答えはやはり彼らしいものだった。
それが最善とは言い切れず、また一軍の将としては少し危ういが、補佐できない範囲では全くない。
寧ろ多くの隊士の命を預かる者として、好ましい資質だろう。
ロットバルトの横顔をまじまじと眺め、レオアリスは少しばかり眉をしかめて溜息をついた。
考えがあっての事だとは判る。
「――まあいいけど、お前の考えてる事は判りにくいんだよなぁ」
「そうですか？　しかし私も、貴方が考える事がそっくり判る訳でもない。推測する必要はいつだってありますよ」
「推測？」
「日頃の言動などや先ほどのような議論から、応時の際に取るだろう対応をある程度予測しておく事は必要でしょう。想定があるのと無いのとでは差が出ますからね。無論一つの想定のみに固執するのも好ましくありませんが」
レオアリスはロットバルトの意図を理解して――呆れた。
「――あれは全部わざとか……」
（こいつは）
全て布石だ。数手先を見据えて状況を整えていく。
自分が怪我を負った事も単なる一つの要素に過ぎず、常に盤上の駒を動かすように、物事を考えているのかもしれない。
真面目に悩んだのが何だったのか――
（ああ、違う）
今だから、真剣に考えられたのだ。いざそうした場面に直面して、咄嗟に考えられる事は少ない。
かと言って、怪我をした時くらいもっと違う考え方をしろ、とやはり腹は立つが。
「さて、どちらに向いますか。先ほどの咆哮は良く位置を掴めなかった」
「俺もだ、かなり反響したからな……まずカイを戻して状況を聞こう。――カイ」
レオアリスが呼ぶと、まるですぐ隣に控えていたかのように、カイが中空に姿を現して彼の肩に降り立った。
カイが黒い嘴を広げクワァ、と鳴く。その言葉の意味を汲み取り、レオアリスは肩を落とした。
「どうしました？」
「合流できてないらしい。……まだ」
最後の「まだ」に力が込められていて、レオアリスの思いの丈が伺える。そしてしみじみ溜息をついた。
「何でじっとしてないんだろうな……」
ロットバルトの蒼い瞳にはちらりと微妙な光が過ったが、感想は控えた。
賢明だ。物事には口を出すべき事と口を出すべきではない事とがある。
そもそも性格だから諦めるしかない、と現実を指摘しても始まらない。
「――クライフ中将達の現在地は？」
「地下にいるらしいな。どっちも怪我は無いみたいだから、それで満足するか……。とにかく行こう。場所は判る。洞窟内で動きが制限されてる分、地上より合流しやすいかもな」
一番はじっとしててくれるのがいいんだが、と虚しく付け加え、レオアリスはカイを追って洞窟の奥へ足を向けた。
先ほどレオアリスが確認に行った方向だ。カイはあの別れ道の左側を選んで進んだ。
「大丈夫か？」
少し歩く速度が早いかもしれないと、レオアリスは歩きながら後ろを確認するように振り返った。

「歩くのと、頭を使う分には全く」
と言いつつ、ロットバルトはもう一つ付け加えた。
「考えてみれば最近、参謀官という職務の範囲が曖昧になっているように感じますね」
「――」
「まあそもそも、大将の職務範囲からして曖昧ですが」
「――」
レオアリスは立ち止まり、口元に少々自棄気味の笑みを刷いた。
「細かい事をあんまり気にするなよ。ガッチリ型にはめ過ぎて問題の押し付け合いなんてつまらないだろ？」
「それは一理ありますね。境界を引き過ぎて結果、境界が曖昧になる事は少なくない」
「――」
レオアリスはまた意外そうにロットバルトの顔を眺め、ああそうか、と心の中で呟いた。
元々ロットバルトは議論する事には積極的で、根拠や理由を示している相手の意見を否定する事はない。
ただし、自分なりの視点を持っていなければ容赦なくやり込められるが。
（面白いかもな、案外――）
そういうやり取りができるのは、考えてみれば結構、心が弾む。
誰かの受け売りや固定観念など受動的にではなく、能動的に物事を考えるという事だ。
再び、洞窟が鳴った。
打ち寄せる波のように咆哮が走り、二人の足元を打ち抜け、全身を叩く。
先程よりも強い怒りに満ちた気配が近付いてくるのが判る。後方からだ。
地上はまた吹雪いているのだろうかと、頭の片隅で思った。

「まずいな……本当に、蛇の巣穴に手を突っ込んじまったかもしれない。手どころじゃないか」
ここはほぼ間違いなく、あの獣の巣穴だ。
この一連の出来事の理由が巣穴を守る為だとしたら、子供がいる可能性が高い。
子供がいた場合、獣は普段以上に緊張し、侵入者を阻もうと当然必死になるはずだ。
「可能な限り近付かずにここを出たいですね」
子供には。
「ああ。下手に近寄ったら親が収まらないからな。本当は出口があれば今すぐにでも出るべきだ」
ここはあの獣の棲み処（すみか）、守っている大切な場所であり、ここでは完全に、レオアリス達は歓迎されざる侵入者だ。
獣が追い払おうとするのは当然の行動なのだ。
「急ぎましょう、追いつかれると厄介だ。とは言っても、さすがに獣の足には敵わないとは思いますが」
ロットバルトの言葉を容れて、歩く速度を少し速めた。道はまだずっと、緩やかに左右に曲りながら進んでいる。
暫く進んだ辺りで、カイは声をあげてレオアリスに思考を伝えた。
「アスタロト達の気配だ、すぐ――」
近い。もうすぐそこに、アスタロト達がいる。獣が追い付くにはまだ少し猶予がある。
漸く――、と、レオアリスは息を吐いた。
「間に合った」
道は大きく左へ曲っている。水の流れる音が聞こえ、曲がり角に近付くにつれて次第に大きくなった。
そして、人の声。
「アスタロト――」

曲った瞬間に飛び込んできた光景に、レオアリスは驚いて立ち尽くした。

## 十二

角を曲がった先に展開した光景を目の当たりにし、レオアリスは呆然と立ち尽くした。

いや、唖然として立ち尽くした、と訂正した方がいいか。

「いやー、もう、ほんとカワイイ～！　ぬいぐるみみたいだよねぇ～」

「ふわっふわですねぇ、毛並み」

「連れて帰りたい！　連れて帰りたい！」

「さすがに駄目ですよ、野生の動物ですから」

アスタロトとアーシア、クライフとフレイザーが、広い空間の壁際で何やらこちらに背を向けて、中腰状態で屈み、何かを覗き込んでいる。声の主はアスタロトとアーシアだ。

周囲は広い空間になっていて、奥の方は三分の一ほどを占める泉があった。白い湯気が上がっているという事は、それも温泉なのだろう。蒸し暑い。

その温泉の脇にアスタロト達はいた。

「――」

しかし、とことん和(なご)やかだ。

レオアリスとロットバルトのいる場所からはアスタロト達が何を囲んで和んでいるのか判らないが、レオアリスは嫌な予感を抑えて一度ゆっくり深呼吸した。

取り敢えず。

「……アースターロートー……！」

「ひいっ」

アスタロトはびくりと飛び上がって振り返り、声の主を見つけてほっと胸を撫で下ろした。

「あっ、何だぁ、レオアリスじゃん！　びっくりさせるなよもぉ～、地の底からみたいな声響かせちゃってぇ」

これが――心配して探していた人間に対して掛ける言葉だろうか。びし、とレオアリスの額に血管が浮く。
「何だじゃねぇ！」
弾む足取りで近付いてくるアスタロトを、レオアリスは容赦無く睨み付けた。
「何」
怒ってるの、とはさすがにアスタロトも口にしなかった。思い当たる節はある。
アスタロトはレオアリスの前に来ると、少し殊勝な様子で立ち止まった。
「お前なぁ、ふらふらふらふらふらふらふらすんな！　全く、少しは探す方の身になっておとなしくしてろよなぁ、お前、マジで有り得ねぇ」
「……エラそう……今何回ふらふら言った？」
「何だ？」
「――別にっ」
ぷいと顎を反らし、その拍子にアスタロトの身体の陰になっていたモノが、レオアリスの視界に入った。
彼女がさっきまでしゃがみ込んでいた壁際の。
レオアリスはもう一度、呼吸を整えた。
「……何だ、それ」
口元に涼しげな笑みを浮かべ、極力穏やかに、そっと尋ねる。
いや、聞かなくても判っている。
というか、聞きたくない。
アスタロトは我が意を得たりと瞳を輝かせ、ぱっと半身を向うへ向けた。
よく見える。フレイザーとアーシアが顔を見合わせ、気まずそうにそっとそれから離れるのも見える。
「かわいいでしょ！　赤ちゃんだよ～。さっき吠えてた獣の子供かな？」
「――」
そこにいたのは、小さな白い獣が四頭。大人の猫くらいの大きさだ。
まだ生まれて間が無いのか上手く立ち上がれないようで、温かそうな枯れ草を敷いた寝床に寝そべり、互いにくっつくようにして時折一生懸命鳴き声をあげていた。
大きめの手足を突っ張るようにうんと伸ばしている姿が、非常に、本当に可愛らしい。
「へえ、手足がしっかりしてて、でっかくなりそうだな――、……じゃなくて、いや。可愛いとかそんな問題じゃないだろう」
ロットバルトはクライフ達の方へ歩み寄りつつ、可能な限り落ち着いた話し合いに持ち込もうとしているレオアリスの努力を見守った。
「嘘だぁ、あれがかわいくないっての？　お前それって目が変。疲れて余裕がないんじゃないの？」
「そうだなー、無いかも、余裕。色々と」
クライフとフレイザーは歩み寄るロットバルトに顔を向けた。
視線を交わし、クライフが親指で洞窟の片側と獣の子供を指し、現状の問題点はそれで確認できたようだ。
「にしても、お前何だその怪我ぁ、情けねぇなぁ」
わざわざ背中を覗いた訳ではないが、包帯で肩を固めているせいで上着は羽織る程度、隠しようもない。
「大丈夫なの？」
見咎めたクライフとフレイザーに対して、それは後回しにというように片手で制し、ロットバルトは別の事を尋ねた。
「あなた方が来た方向は？」
「方向？　右だよ、今お前が来た方向」
クライフは獣の咆哮が響いてきた方を指差した。
「同じか――とすると、まだこの奥の様子は全く判らないという訳ですね」

「そうね……出口があるかどうかも、行ってみないと」
三人は一旦口を噤んで視線を戻した。
今の最大の問題は、そこに居るアレだ。
見つめれば見つめるほど可愛らしい。
感想はアスタロトが代弁してくれている。
「やっぱ今日は疲れたもんね。レオアリスもあのコ達眺めて疲れを癒しなよ、ホントかわいいんだよー、連れて帰りたくない？」
「まあ落ち着け。良く考えろよ、そいつ等はあの獣の子供だろ？」
「やっぱそう？　私は親は見てないんだけど」
「そう。だから」
「もしかしてすんごく大きくなるとか？　でも私飼う自信あるけど」
「いや、そうじゃなく、ここに子供がいるって事はどういう事か判るだろ」
先ほどの咆哮は、洞窟の中で響いていた。
そして今、獣の気配は確実にこちらへ向っている。
「今すぐここを離れて」
「あっ見て、お腹空いてるみたい。よーしよし、お前達の母さん早く帰って来ないかねぇ」
アスタロトは獣の子供達の傍らに駆け寄ってすとんとしゃがみ込み、ほにゃらんと蕩(とろ)けた顔を向けた。
レオアリスは頭痛を堪えるように額に手を当て、それからふう、と息を吐きだした。
間に合わなかった。
「――帰って来たみたいだなァ、親」
ずしん、と足音が鳴り、低い唸り声がした。
獣の子供達とアスタロトが強制的に作り上げた和やかな空気を一掃するような、身を震わせる響きだ。
レオアリスは振り返り、声の主と再び向かい合った。
獣は通路の入り口に立ち、レオアリスとの間は二間ほどしかない。
母親――おそらく――の姿を見つけ、四頭の子供達が一斉にみぃみぃと鳴き声を立てる。
目前の怒りに満ちた白い獣と、みぃみぃ鳴いている子供。
「――緊張感ねぇな……」
「そうね、結構深刻に命が危険な状況だと思うけど」
背後で囁くクライフ達の声はレオアリスにも聞こえていて、全くその通りだと溜息を落とした。
みぃみぃと子供達が必死に乳をねだる鳴き声と、短い四肢に精一杯力を込めて立ち上がろうとしている姿。
（あ、コケた）
思わず手を伸ばしたくなるのは人情というものだが――。
触ってはいけない。鉄則だ。
アスタロトも触らずに立ち上がり、そっと戻ってレオアリスと並び、獣の親を見上げた。
「あのさぁ、レオアリス。私もさすがに気が付いたんだけど」
「何だ？」
二人とも、視線をじっと獣に据えたままだ。
「やっぱ野生の獣の子供に近寄るのは、良くないよね」
「そうだな」
「ごめん。私が間違ってた」
「いいよ。……ていうか、今ちょっと感動した」
レオアリスが真面目にそう言ったせいで、アスタロトは面映ゆそうに右手で頬をさすった。
「……それで、どうする？」
獣は二人の前方で前脚を折って身体を前傾に屈め、今にも飛び掛からんばかりの体勢だ。
怒りはひしひしと伝わって来る。閑かだった空気もここに来て、漸く本来の、緊張に満ちた様相を帯びた。

剥き出された牙、力が張り巡らされた四肢。
飛び掛からないのは、ただ――そこにある存在を恐れ警戒している為で、子供に近付いた事への怒りは変わらない。
レオアリスにも、アスタロトにも、この獣一体、容易く排除する事はできる。
だが自らの意志で退かせる事はできないだろう。
どうする、とアスタロトが尋ねたのは、そういう事だ。
「お前は斬れない。私にも、あんなカワイイ子供達の親を焼くなんて、絶対できないな」
「当然、斬るつもりなんて無い。だからって俺達をこのまま普通に見逃しもしないだろうが……」
レオアリス達は獣と、獣の子供の間に立っていた。獣は彼等が辿ってきた道を完全に塞いでいる。
獣の脇を擦り抜けては行けず、かと言って後ろへ――、これ以上一歩でもレオアリス達が子供に近付けば、獣はその瞬間に牙を剥く。
退くも進むも選び難い、危うい均衡がそこにあった。
アスタロトが獣を刺激しないよう、余り口を動かさずに呟く。
「――お前、法術使えないの？　ほら、眠らせるやつとか」
法術ならば、この場を最も平穏に収められると思ったのだ。
「すげぇ面倒なやつは一個知ってるけど、術書が無いとな。空（そら）で使えるのは攻撃系だけでさ」
「――お前……、私と変わんないな」
呆れを含んでアスタロトは呟いた。
フレイザーはレオアリス達の向こうにいる白い獣の姿を見つめた。
洞窟の通路を塞ぐほどの体格だが、それがこの場所での動きを妨げるほどは期待できないだろう。獣にとっては、開けた前へ出ればいいだけなのだ。
強靭で鋭い牙を持つ顎は、人一人簡単に噛み砕ける。

（上将とアスタロト様が一番前にいるなんて、失敗だわ）
しかし彼女達もまた、動けない。一歩でも踏み出せば、それだけで張り詰めた均衡を破りそうだ。
「ロットバルト、何か無い？」
そっと傍らに囁く。
「こちらに傷付けるつもりはなく、相手はただ見逃すつもりはない。――敵意が無い事を証明して怒りを収められるかでしょうね」
「敵意がって、そりゃ人相手ならそうだけど、言葉も通じねぇ相手にどうやって証明すんだよ」
「方法は無くはない。結果は五分――いや、どうかな」
独り言のようなのは、ロットバルト自身その方法に納得が行っていないからだとは判る。
「でも、何かあるなら上将に」
「――」
ロットバルトは黙った。
全く、奨（すす）める気にはなれないやり方だからだ。
しかし口に出すまでもなく、レオアリスはそれに気付いていて、その方法を選ぶだろうとは推測できた。
斬るつもりが無くこの状況では、取れる手段は限られる。
誰も置いていかない、と、そう言ったのはただの理想論ではなく、レオアリスの信念だ。
（どちらかというと、性質か）
意識的にしろ無意識にしろ、その根本の下（もと）に動く。
こういう状況になった以上、斬るという選択肢は当然、あるとロットバルトは考えている。
冷酷かそうではないか、それは単なる感情であり、互いの命が同じ天秤に載っている限り、感情と手法とは切り離して最善策を取るべきだと

も。
　互いに命は一つしかない。穏やかな譲り合いができる問題とは違うからだ。
　レオアリスが手を下すのを厭うなら自分がやってもいいが――、そんな収め方をレオアリスが望む訳もない。
（まあ仕方がない）
　そういう上官のもとに、彼等は半ば好んで付いている。
「で、結局どうすんだ？」
「上将に任せて様子を見ましょう。ただ危険と判断したらいつでも出られる心積もりを。あの二人を護るのを最優先で考えてください」
「それって策か？　ひょっとして無策？」
「……個人的には、餌を与えている内に撤退する策を採りたいところですね。ああ、それが一番有効かな」
「餌なんて――」
　どこに、と言い掛けてロットバルトの含みに気付き、クライフはちょっと引き攣りながら頷いた。
「了解した」
　獣は動かず、レオアリス達も動けない。
　時間にしてみればそれほど長い間では無かったが、もう半刻くらいは睨み合っている気になってきて、レオアリスは微かに苦笑を浮かべた。
「――いつまでも睨み合ってたって仕方ない。お互い利害は一致してるんだ。俺達はただここから出て行ければいいんだし、お前の子供はずいぶん腹を減らしてるみたいだしな」
　獣は低く威嚇の声を上げた。
　ピリピリと空気が張り詰める。
「近付いたのは悪かった。怒りを収めてくれ、って言っても無理か」
　口先だけでは信用など得られない。何だってそうだ。
　レオアリスは右手を鳩尾に当てた。すぶりと右手が沈む。
　青白い光が零れ、獣はぴくりと反応した。
「えっ、ちょっと」
　アスタロトが驚いて隣を見つめる。斬るつもりはないと、レオアリスは今さっきそう言ったばかりだ。
　だが剣は既にその姿を現わした。
　アスタロトの深紅の瞳が見開かれる。
「――え……」
　まさか、と思わず呟く。
　レオアリスは右手に剣を提げたまま、左手を鳩尾に当てている。
　更に、もう一本――
　空気が震える。
（二刀――）
　まさか。
　レオアリスが二刀を用いるなど、滅多な状況ではあり得ない。
　アスタロトが知っている限りでは、黒竜と、そしてバインドだ。
（何で……）
　斬ってしまおうと、そういうつもりなのか。
　左手が剣を掴み、白々した刃（やいば）が現われる。
　二振りの冴えた刃から零れる光が洞窟内を青白い光で満たし、獣の白い毛並みは光を浴びて発光するようだ。
「――っ」
　アスタロトは叩きつける剣気に改めて身を震わせ、そこにある力を思った。足に意識して力を込めていなければ、退いてしまいそうになる。
　見る度に美しさに呑み込まれそうになりながら、身体の奥底に呼び起こされる感覚は――、恐怖だ。
　思わず上擦る呼吸を抑える。
　チリチリと見えない刃が皮膚を撫でている。
　レオアリスは獣へと一歩踏み出した。
　獣は低く唸り緊張に張り詰めた身を屈め――、だが一歩も退りはしな

かった。
緑の双眸が恐怖と怒りを宿して燃え盛る。
（すごい。あの剣を前にして）
人ならば判る。
何かの信念の為に、自分以外の大切な何かの為に、確実な死が目の前にあると判っていても、退かない時がある。
けれど獣は信念に基づいて行動する訳ではない。
（違う……そうじゃない）
アスタロトは獣の緑の瞳を見つめた。
そこに宿る光。
（おんなじなんだ）
逃れ難いはずの、本能的な恐怖を感じながらも――
退かない。
子供を守る為に。
レオアリスは獣の前に立ち、その頭を見上げた。
「――母親か」
今回の件でシュランに大きく人の手が入り、黒森に入って来る人間は増えた。
再び目の前にして良く眺めれば、獣の白い毛並みからは艶が失われ、疲労の色が濃い。
おそらく飲まず食わずで、黒森に入り込む侵入者を追い払うのに体力を削り続けて来たのだろう。
命を掛けて、どんなものからも我が子を守ろうとするのだ。
母とは。
「知ってるよ――、俺も」
覚えている。
顔は思い出せなくても、あの時自分をあの剣から、力の暴走から守ろうとした温もりを覚えている。
里を焼き尽くす炎から。
自らの命を盾に、護ろうと。
（そうか……）
頭の片隅で何となく、思った。
剣士とは、斬り裂く為の剣（つるぎ）だと、自分でもそう思っていた。
或いは、護る為の剣。
けれどそれだけでは決して無い。
盾にだって――なれる。
意志一つ。
あの温もりを、覚えている。
ふ、と獣は緑の瞳に不思議な光を揺らがせた。
瞳がレオアリスの意識を覗き込むように注がれ、そしてその向こうにいる彼女の大切な子供達に向けられる。
「でも思うんだけどさ――やっぱり、そんな事よりずっと、傍に居たいだろ――、子供は」
アスタロトはレオアリスをじっと見つめ、喉の奥に競り上がったものを堪えた。
（母様――）
レオアリスは膝を付き、獣の足元に剣を置いた。
驚き、そしてレオアリスの意図を理解して、アスタロトはその姿を見守った。
再び立ち上がり、獣に視線を注いだまま、レオアリスは数歩下がった。
レオアリスの手から離れた剣が二、三度ゆっくり明滅し、纏っていた光が次第に薄れていく。
洞窟内を支配していた肌を切る圧迫感が、剣の光と共に消えた。
静寂が残る。
「――」
アスタロトも、後方にいるロットバルト達も、呼吸すら忘れて見つめていた。

傷付けるつもりはないと、言葉では伝わらない代わりに、レオアリスはそんな方法を取った。
横たえられた無機質な剣。
それが示す意味は明確だ。
それでも、獣が怒りを収めなかったら――
侵入者を噛み砕こうと決めた時、剣を手放したレオアリスはどうなるのだろう。
（いざとなったら、私が……）
アスタロトは浮かびかけた言葉をぐっと飲み込んだ。
そんな考えを持つだけで、目の前の状況を裏切るような気がしたからだ。
それは自分の中にもある、脆く大切なものをも裏切ってしまう気がした。
（大丈夫――）
獣は低く唸りながら、レオアリスに視線を注いでいる。
洞窟内にその唸り声だけが響く。
瞬き一つの間が、永遠に感じられた。
やがて、獣はレオアリスの瞳を覗き込むように鼻先を近付けた。
鋭い牙の並ぶ顎を開き――
べろん、と大きな舌で頬を舐めた。
「っと」
頭で柔らかくレオアリスを押し退けるようにして、その横をすり抜ける。アスタロト達に緑の穏やかな瞳を向け、子供達の待つ所まで歩き、どさりと横たわった。
みぃみぃと鳴き声を立て、子供達は上手く歩けないながらも母親の傍に寄ると、乳を探り当てて飲み始めた。
アスタロトはもう一度、獣の母子がいる方を振り返った。
洞窟の奥は静かだ。とても。暗い洞窟に穏やかさすら感じるのは、多分アスタロトの抱(いだ)く想いのせいだろう。
少し前を歩くレオアリスに追い付く為、足を早める。
並んで、隣にある横顔を見た。
たくさん、言いたい事があるのだが
「――お前、やる事無茶苦茶だな」
口に出してはそう言った。
「そうか？　無事済んだじゃないか」
平然とした答えに、頬を膨らませる。
あんな危険な事をして、本当に無事済んだから良かったようなものの、無事じゃ済まなかった場合の事は何か考えていたのだろうか。
「じゃあ聞くけど、勝算は確実にあったの？」
「――勝算か、それを言われると厳しいんだよな」
考え込んでいる。アスタロトはぴたり、と足を止め、湧き起こる思いの丈を籠めて指を突き付けた。
「……お前は、私のコト色々言う資格はない！」
「そんな事ないだろう」
「あるあるーっ！」
きいっとアスタロトは髪を振り乱した。
その様子を不思議なものでも見るような興味深そうな瞳で眺め、それからレオアリスは前方を指差した。
冷たい外気が流れてくる。
「出口みたいだぜ、ほら」
先導していたカイが出口を示して円を描くように飛んでいる。
「――やったぁ！　今度こそ温泉だよね！」
アスタロトはぱっと瞳を輝かせ、元気良く外へと駆け出した。
白く口を開けた出口が近付く。今はもう夜になっていて、洞窟の中と

外はそれほど明るさが変わらないが、外の方が明るく見えるのは積もった雪のせいだ。
ぼんやりと森の姿が浮かび上がっている。
「温泉〜！」
積もった雪の中に駆け出し、途端に身を包んだ冷気に足を止める。
アスタロトは爪先から頭のてっぺんまで、あっという間に震え上がった。
「寒ッ！　戻る！　中戻る！　さっき温泉あったし」
「待て待て。戻ったら今度こそ食われるぞ。二度も許しちゃくれないって。ちょっとの間だから我慢しろよ」
くるりと向きを変えたアスタロトの腕を、追い付いてきたレオアリスが押さえる。
「いい。こんな寒くちゃ死んじゃうよ〜！　どうせ死ぬんならあそこのあったかい温泉に浸かりながら死ぬ！　本望だもん！」
今は吹雪いてこそいないものの、深々と雪が舞い落ちていて、骨まで凍りそうなほど寒い。
黒森に来た時は次第に身体が慣らされていたからまだ良かったが、洞窟の暖かさから急にこんな寒さの中に放り出されては、もう根性とか我慢とか、そんな精神論は投げ捨ててしまいたい。
「吹雪いてないんだからそんなに寒くないじゃないか」
『そんなに』……？　お前と体感温度の話はしたくない」
感覚が違い過ぎる。
「何だそりゃ。――まあ考えてみろよ、あそこは温泉だけだけど、シュランに行けば温泉も食事もあるぜ？　いいのか、せっかくの豪華な飯を食わなくても。楽しみにしてたんだろ」
「――」
アスタロトはきょろきょろと、洞窟と白く冷たい雪景色とを見比べた。
食事、と聞けば、急速にそれまで忘れていた空腹感が甦る。
寒さ、対、空腹。
「――シュランに行く」
レオアリスはにやりと笑った。
「だよなぁ。……そうだカイ、ハヤテ達を呼んでくれ。待機してるはずだから」
「しかし、ここはどこなんスかね〜。シュランは近いんスかね〜」
レオアリス達に並んで洞窟の出口に立ったクライフ達も、身体を抱え込み閉口した様子で辺りを見回した。
アスタロトほどではないが、このまま洞窟に留まっていたい気持ちは良く判る。
「マジ寒イ。ロットバルト、お前上羽織っただけで平気かよ」
「いや、この中で四半刻も歩いたら死にますね」
「あら、見て、あそこ」
フレイザーが指差した方向、樹々の間にチラチラと揺れるものがある。
「灯りだわ」
ほっと肩の力を抜くような、そんな温もり感じられる、柔らかい光だった。
近付いていけば、灯りは一つではなく、二つ、三つと樹々の隙間に灯り出した。

## 十三

樹々の合間に揺れていたのは村の灯りと、そして良く見れば松明だった。
「何だ？　人が出てるみたいだな」
「夜遅く――っても今何時か判りませんが、変ですね。慌ただしいっつうか」
「村で何かあったのかしら」
何か問題があったとしたら、やはり思い付くのはあの獣の事だ。
「――いってみよう、近い」
松明の方へ歩いていくと向うもこちらに気付いたのか、一つが揺れながら近付いて来た。
樹々の間を支配していた夜の闇が松明の灯りに払われる。松明と共に現れたのは五十代半ばほどの男だった。
「おお、あんたら」
男は少し驚いた顔で、レオアリス達を確認するように見回す。
「あんたら王都から来た軍人さんかね」
「そうです――何故」
知っているのか、と尋ねる前に、男は後ろを振り返るようにして大声を上げた。
「おーい！　いたぞー！　こっちだ、ここにいたー！」
声は森に良く響き、ぎょっとしてレオアリス達は顔を見合わせた。
静かだった森が賑やかになる。松明が揺れながら急いで近付いてくる。
アスタロトはこっそり囁いた。
「もしかしてさ、私達遭難したと思われてる？」
「……そうかもな……」
と言うか実質、遭難だ。
「もしかしたら、村人総出？」
「……かもしれない」
かなり――情けない。村に何かあったのかと心配したが、心配されていたのは自分達の方だったとは。
そうしている間にも、松明はすっかり集まってきて、レオアリス達の周囲を照らした。森は昼のように明るくなった。何人いるだろう。十人近いか。
「おお、いたいた。全員か？」
「多分なぁ」
「無事で良かったなあ」
意外と早く見つかって良かった、という声も聞こえる。その中に、すこし気になる響きがあった。
「向うの方から来たみたいだぞ」
「あっちは、白毛（しらげ）の」
（白毛？　――ああ）
あの獣の事かもしれない。いい名前だ。
ただ気になったのは、そこに警戒の響きがあったからだ。
獣を、ではなく、レオアリス達がその方向から来た事を。
レオアリスと目が合うと、男達は慌てて視線を逸らせた。レオアリスは引っ掛かりを感じながらも前に出た。
「かなりご迷惑をかけたみたいで、申し訳ありません」
一番初めに現れた男はレオアリスをしげしげ見つめた。
「若いなぁ、あんたが剣士さんだろ。まだ子供だなぁ」
率直な言い方に思わず笑うと、男は慌てて手袋をはめた手を振った。
「いや悪い、じゃなくて申し訳ない、大将殿。無事で良かったです。わしらはついさっきスウェンの旦那から聞いて、探しに出たばっかりだから気にせんでください」
「スウェン？」
「ああ、村長の息子で、今度新しくできた北方公のお屋敷の管理やってんです」

昔王都で勉強してたんですよ、と男は誇らしそうに付け加えた。
「ベールの温泉とこの？」
アスタロトの問いに頷く。綺麗な少女を見て男は照れ臭そうな顔をした。
「そうです。まあほんと無事で良かった、館に案内しますよ。腹も減ったでしょうし、冷えたでしょう。あとちょっと我慢してもらえりゃここはお誂え向きの温泉がありますんでね」
遭難者を探しに来たというより、来客を迎えに来たような口調だ。他の村人達も余り気にした様子もなく三々五々、村へ引き返し始めた。
どちらかと言えば早くこの場から離れたがっているようにも見えなくもない――が、レオアリス達が見つかって安堵した様子は本物のようだ。
「――村は大丈夫ですか？」
歩き出した男に付いて問い掛けると、歯切れの悪い答えが返った。
「え、いやぁ……」
急いでちらりとレオアリス達を見る。
「うちは問題ないよ、いや、問題ないです、特に」
「白毛って、誰か言ってたけど、でかい獣の事ですか。吹雪を呼ぶ」
白毛という呼び名が気に掛かった。
それにはどことなく、親しみが感じられて――
「俺の育った村の辺りじゃ見かけなかったけど、この辺には多いのかな」
男は何かを飲み込んだように立ち止まった。困った顔で口籠もる。
「その、大将殿。そこんとこはわしより、スウェンの旦那から聞いてもらった方がいいですよ」
「――」
森が切れ、目の前に小さな村落が広がって、アスタロトが歓声を上げた。村落のあちこちから白い煙がもうもうと上がり、村を半分覆い隠して壮観だ。
「これ全部温泉の湯気なの？」
「そうですよ、年中こんな状況です」
少し得意そうな口調で言いながら、男は村の中の道をさっさと抜けて行く。
本当に小さな村だ。レオアリスの村とさほど変わらない、高い三角の屋根と土壁の質素な家がぽつりぽつりと立っている。
懐かしい、と思っている間に男はそのまま村を通り過ぎてしまい、意外に思っていると、しばらくして湯気と樹々の向こうを指差した。
「あそこです」
白い湯気と樹々の間から立ち現れたのは上空から見えた村とはまた違う、小振りながら白い石を組んで建てられた、白亜の宮殿といった瀟洒な外観だ。建物全体が湯気の中に溶け込むように見える。
「へえ、すごいな。さすがベール」
アスタロトは見上げて感嘆の声を上げた。
「そうだな……」
そう言いながらレオアリスにしてみれば、この黒森にこんな立派な館は違和感があった。
正面玄関のある棟が三階建て、左側に二度ほど折れながら伸びている翼棟は二階建ての、非対称の造りになっている。
北の果ての小さな村に造られた事から、この辺りの村の家屋がそのまま宿になったのを想像していたが、これは王都近郊で見られるような貴族の狩猟用の邸宅という印象が強い。
「ペイリーさん」
玄関階段の上に立ち声をかけたのは、四十代半ばほどの、身だしなみを整えた男だった。ペイリーと呼ばれた男は「スウェンの旦那ですよ」とレオアリス達へ告げて、階段の下まで近寄った。
「表でずっと待ってたんか、寒かろうに」
「いえ、窓から灯りが見えてね。ずいぶん早かったね」
「ああ、捜しに行こうとしてたとこでちょうど会ってな」
「そうか、ありがとう」
スウェンはほっとした様子でレオアリス達を見回し、深々と礼をした。

管理人というよりは邸宅の執事といった印象がある。
「ご無事でお着きになられ、何よりです。予定より遅うございましたので、村の者に頼んで人を出してもらいましたが、余計な事をしたようです」
顔を上げてまずはそう言った。
「いえ、案内してもらえて助かりました。少し――、森を通るのに戸惑って」
そう言いながら確認したスウェンの面には、森で起きた事態を了解している表情が浮かんでいる。
ペイリーに礼を言い、スウェンはレオアリス達を扉の中へ招いた。
「取り敢えずは中へ。身体をお休めになってください。飛竜は厩舎がございます、お預かり致しましょう」
白を基調とした館の内装はすっきりと無駄が無い。外の黒森の佇まいにどこか似ていた。
けれど館の中は吹き抜けの玄関広間も充分暖かく、凍る世界を旅してきた客達にほっと春のような温もりを与えてくれる。
黒森じゃないみたいだ、とまた思った。
「――ここも、何事も無く？」
確認するように尋ねると、スウェンはすぐ頷いた。
「はい」
「カレッサの街ではシュランとの連絡が絶えていると聞いたんですが」
「左様です。ここひと月ほどの間天候が悪く、往来できる者がおりませんでした」
森の外と行き来したのは伝令使だけです、と付け加え、スウェンはレオアリス達を招いて広間の階段を昇り正面にある扉を開ける。
レオアリス達は視線を見合せ、お互いに似たような感想を抱いているのを読み取った。
吹き抜けの広間よりも明るく気持ちのいい部屋で、壁際の暖炉には火が赤々と燃え、長椅子や卓が何組か置かれている。
広い窓は今は厚い日除け布で覆われているが、昼なら白銀の世界が見えるのだろう。それとも湯気の立ち込める眺めかもしれない。
「こちらが談話室になっております。すぐにお食事の支度ができますので、それまでこちらでお寛ぎください。お疲れでしたら先ずはお部屋へご案内しますが、如何なさいますか」
「いや、ここで――」
疲れてもいるし空腹でもあったが、それよりもまずは確認すべき事がある。
先ほどから、どうも感覚が違う。アスタロトやロットバルト達もそれは感じているようだ。
暖かい屋敷の中だからなのか、いや、先ほどの村人達も同じような様子だったからそれだけでは無いだろうが、外で起きている事態とここの空気はかけ離れているというか――、そもそも外部との連絡が絶えていた事さえ余り大したものと捉えてはいなさそうに見える。
こんな状況だ、もっと深刻な対応をされ、こちらにもそれを求められると想定していたのだが。
つまりは何とかしてくれ、あの獣を倒してくれ――、と。
そう言われたらどうするべきかと、道すがらずっと考えていた。
スウェンは退らずに扉の前に背筋を伸ばして立っている。レオアリス達からの問い掛けを待っているのだ。
「……連絡が絶えている間、ここでは何か問題は？」
「その事自体は、さほど。大将殿は慣れておられるかとは思いますが、雪で道が閉ざされるのはこの辺りでは珍しい事ではございませんので」
「まあ、そうだよな」
レオアリス達も真冬は村からほとんど出ず、街に行くのは降雪が少なくなりだしてから、それこそ三ヶ月振りという事も珍しくは無かった。
騒ぐほどではないと言われれば、そうも思う。平素なら、という条件付きでだが。
今回はスランザールが疑問を持って、一旦はベールが調査を指示し、

カレッサの街でも不安視されていた。
だから普段の状況とはやはり異なるはずだ。
（ん……あれ？）
何かが引っ掛かり、レオアリスは考え込むように腕を組んだ。
「それで納得しちゃうってすごいなー」
呆れた口調で言い、今度はアスタロトが尋ねる。
「でもここはただ雪で閉ざされていた訳じゃなかったでしょ。被害とかは無かったの？」
「幸いございません。食料や燃料の備蓄は習慣的にしておりますので。今のところ、かもしれませんが」
「白い大きな獣がいるでしょ、森に」
「ああ、雪獣でございますね」
スウェンはあっさりと頷いた。
「雪獣。あれは雪獣って言うんだ」
アスタロトはスウェンの顔をじっと眺めた。
「この辺りに古くから住み着いている、吹雪を呼ぶ魔物です」
「危険じゃないの？　森を閉ざしてたのはあの獣だよ、今言ったみたいに吹雪を呼んで――事情があるけど」
「お会いになりましたか」
「うん、会った。白い綺麗な毛並みの」
スウェンは一旦黙って瞳を見開き、何かを覚悟したような様子で尋ねた。
「では、貴方様方はあの獣を」
レオアリスと、アスタロトの上をスウェンの視線が流れる。
レオアリスはスウェンの視線の意味と、それから村の人々の様子の意味を考えながら、首を振った。
「――傷付けてはいない。あの子供達も」
スウェンは明らかに、安堵の表情を見せた。
「――」
安堵――。それこそ意外だ。
一番危険に曝されているはずの住人が、安堵をする。
「白毛って、愛称でしょう」
レオアリスは先ほど感じた事を口にした。
親しみさえ感じられる響きからは、種の名称ではなく、愛称だとそう感じられた。
「――その呼び名は、どちらで」
「さっき探しに来てくれた村の誰かが言ってた」
そうです、と言う代わりにスウェンは頷いた。
「……あの獣は、最近ここに来たわけじゃないんだな」
「はい」
アスタロトが瞳を丸くする。
「え、じゃあ前から同じ事があったの？」
「いいえ。これほど荒れたのは初めての事でございます。これまでは互いに境界を守って、共存してまいりました。と言っても本来の共存というよりは、我々が白毛にとって脅威になり得ていないだけだと思いますが……今はおそらく子が生まれて神経質になっているのでしょう」
これまでは。スウェンはその言葉をほんの少し強調した。
「そうか――」
感じていた違和感の理由が、何となく判った。
「あなた方は、この状況を北方公に報告するつもりは無いんだな。少なくとも、積極的には」
「――」
ベールの書状には原因について触れられていなかったのに、この男は初めからこの事態が判っていたかのように雪獣の事を口にした。
ベールは早くから問題視していたが、村からの雪獣に関する報告は無かった。伝令使ならば行き来ができたというのに。
「何故」
レオアリスの問いに、スウェンは困ったような表情を返す。

「迷っているのではありませんか」
そう言ったのはロットバルトだ。スウェンは二度ほど瞬きをしてロットバルトを見た。
「元々、この黒森という土地に暮らすという選択をした以上、厳しい環境も他の種族との共存も、当然のものだという考えがあるのでは？　その許容範囲をどこまで持つかは判りませんが――、この場では上将が一番それを理解されているでしょう」
改めて問われれば、それはレオアリスには当然の感覚だった。
特に黒森の生き物は、元々彼等の方がずっと長く住んでいる。
入り込んだのは自分達で、彼等の領域を奪うつもりなどない。
それは黒森に住む者達にとって暗黙の了解だとも言えた。
「かと言って、今の厳しい状況を改善する手段がありながら、好んでその厳しい生活環境を続ける事もない。後から移り住んだ方に全く権利が無いというのであれば、生きるという根底の権利すら否定する事になる」
館の外の厳しい寒さと、春のように穏やかなこの部屋の暖かさは、状況を言い表わしているように思えた。
何も敢えて厳しい寒さの中に身を置き続ける必要はない。
ただ、温泉を資源として活かす事を思い付き、この館を造った時には雪獣の領域を脅かすつもりなど全く無かったのだろうが、その結果、共存するには難しい状況になってしまった。
「一足飛びに結論を提示するなら、共存を諦めて環境を変えるか――共存を選ぶのであれば、ここは閉ざした方がいいでしょうね。そして今まで通りのやり方に戻る」
スウェンは視線を落とした。ロットバルトがスウェンの内心を言葉で補う。
「だが、そう単純に片付けられる問題ではないでしょう」
温泉が資源として成り立つようになり、軌道に乗って定期的な安定した収入が得られるようになれば、暮らしは一気に楽になる。
シュランも、街道沿いのカレッサのような街も潤うだろう。
造られた目的の通り、住人の事を考えれば非常に有効な手段となり得る。
国にとっては辺境の厳しい環境への改善策は急務でもあり、辺境に住む者達にとっても切実な願いでもあった。
「仰る通りです。白毛が道を閉ざした事をどう報告すべきか、我々も迷っておりました。これが唐突に沸き起った問題であれば、全く迷わずに王都へ討伐を依頼したと思いますが……」
「しかし言い訳をするようですが、あの雪獣はこれまで一度も人を襲った事はございません。一方では縄張りに入る他の獣や魔物を退けてくれております。そのお陰で我々の村はこの黒森で安全を保つ事ができておりましたので」
スウェンは日除け布に隠された窓の外に視線を向けた。眼差しにあるのは今なお温かな親愛の色だ。
「つまり隣人なのです。と勝手に思っていると言うのでしょうか、村人も、もちろん私も敬愛し、親しみを感じています。もしかしたら我々の父祖がここに村を作ったきっかけは、雪獣が居たからとも考えられますし――そんな理由から、恥ずかしながら未だに私どもは対応を決めかねているのです」
もしかしたら子供が育てば、白毛もまた落ち着くのではないかと期待しているのですが、とそう言って黙り、しばらくして自分の言葉を否定するように顔を振った。
「いや、いつまでもこのままにしては置けない。もう北方公へお伝えしなくてはいけませんね」
「でも……ベールに言ったらどうなるの？　もしかして」
不安を覚えてアスタロトはレオアリスとロットバルトを見た。
レオアリスは困ったような顔をし、はっきりと告げたのはロットバルトだ。
「大公のお立場としては、領民の安全と生活を守る為に雪獣の討伐を選択せざるを得ないでしょうね。既に計画を打ち出し、資本を投じ、これ

から正に事業として成り立つかどうかの入口に立っています。周囲の期待も高まっている。撤収の選択は状況を考えれば可能性として低い」
「そんなの、ひどくない？」
　アスタロトはここにはいないベールの代わりにロットバルトに抗議した。ロットバルトが悪い訳ではないが、一番、どうにかできそうなのはここではロットバルトだ。
「他に方法ないの？　獣も傷付けないで、このまま温泉やってこの村の暮らしを良くしてく方法が、考えれば何かあるんじゃない」
「いえ、アスタロト様。私どもは北方公に事業を中止していただくようご進言申し上げるつもりです。この一ヶ月の間、私どもはその事を話し合ってまいりました」
「でも、それじゃ後戻りだよ」
「仕方がありません。これまで我々を援けてくれていた白毛を害してまでという選択は、私どもには無いのです」
　スウェンはきっぱりと言った。おそらく早い段階から、それは村人達の間での共通の意思だったのだろう。
「でも」
「いいのです。あなた方にも大変なご迷惑をおかけ致しました。申し訳なかったと思っております」
「それはいいけど」
　レオアリスは二人のやり取りを黙って聞いていた。
　何だが随分と難しい状況になっている。得意分野とは全く言い難い。
　ただ、できることなら力にはなりたい。
　レオアリスはしばらく考え込み、思い付いて視線を上げた。
「例えば、この館を黒森の入り口に移して、そこまで温泉を引くってのはどうだ？　あくまで一つの案だけど、技術的にできるかな。それにその場合もシュランに利益が上がるかどうか」
　無茶を言ったかなと思ったが、ロットバルトはすぐには否定せず、提案を検証するように視線を落とした。
「私はいい案だと思う」
　アスタロトが身を乗り出すように頷いた。
「そうしようよ」
　言葉では簡単だが、実際やるとなれば並大抵の事では済まない話だ。
「専門ではないので明確にはお答えできませんが――、移築や温泉を引く為の管の埋設などは、土木技術上は可能です。後は費用と土地の権利の問題で、それが一番厄介でしょう」
「そんなもんベールに持たせればいいんだよ。ここら辺を治めてるんだから責任があるでしょ。安全に確実に、事業をやる方法があるならやればいいじゃん。私も手伝うし」
　あっさり言えるのはアスタロトならではで、彼女自身の問題なら本当にやってしまうのだろうが――正直それほど単純ではないという考えが明確にロットバルトの面に現れている。
「確かに危機管理を考えれば、そもそもこうした施設自体が黒森の外にあった方がいい。決して悪くはない方法ですが、問題は上将も仰ったとおり、施設を村から離した場合どこまで村の利益として権利を保持できるかですね。
「そうした諸々の取り決めを、口頭ではなく正式な手続きのもとに、証書を以って取り交わす必要がありますし、その際にはまだ目に見えない利益や負荷もある程度算出しておかなくては、後日いらぬ争乱の元にもなります。利権を争って裁判に疲れ果てては元も子もない」
　アスタロトは眉をしかめた。
「……それ、ロットバルトがやってくれるの？」
「残念ながらそれはありません」
　きっぱりと返事が返る。
「何でぇー？！　めんどくさがらないでさ、助言とか資料作りとかやってあげれば」
「関わらないのは当然ですよ。既に所領管理の問題です。北方公の所領に私が口を出したらそれこそ争乱の元でしょう。影も掛からない方がい

い。地政院が入って、北方公、シュラン、移転先の土地に関わる者がいればその者も含めて、公式な場で調整すべき筋のものです。もちろん公、貴方も極力口出しは避けた方が無難でしょう」
「それは――」
そうなんだけど、と呟いてアスタロトはスウェンを見た。
「じゃ、村の人達だけで交渉とか全部やるの？　それはさすがに厳しいんじゃ」
レオアリスが再び口を開く。
「提案だけなら俺からもできるんじゃないか？　所領は関係ないし、黒森は出身地だし」
「――」
暫らく考え、ロットバルトは頷いた。
「今回の調査結果の報告とシュランからの提案に基づいての口添えという形なら、問題はありません。そもそも大公から依頼を受けている話ですしね」
「えっと、じゃあレオアリスから口添えしてもらって――、後はシュランの皆がやるの？」
「そう致します」
スウェンは厳粛な面持ちで頷いたが、こうした調整を地方の小村だけで進めていくというのは実際には相当厳しい話だ。ロットバルトはもう一つ、助け舟を出した。
「調整役としては、スランザール公に依頼するのがいいでしょう。恐らく我々が徒（いたずら）に関わるよりずっといい結果に繋がると思いますよ」
その名前に、その場の全員がほっとした表情を見せた。
「ここを気に入ってたもんな、スランザール」
そもそもスランザールの記事のお陰で、レオアリス達は今ここにいるのだと言っていい。少しくらい骨を折ってもらってもいいだろう。
スウェンも安堵したようだ。
「スランザール公には先日お越しいただきましたし、私が王都で学問を学んだ時にお世話になってもいます。我々としてもお願いしやすい方です」
ただ、スウェン一人で決められる問題ではないのも判っている。レオアリスは改めて言った。
「あなた方はもう一度、この件に関して話し合いをしてください。村の意志が決まったら、連絡をもらえればいい。そうしたら、出来る限りの力になります」
それでどこまで問題を解決していけるか、それは判らないし、レオアリス達に軽々しく保証はできないが。
「王都に戻ったら一先ずスランザールに状況だけ話しに行きます。具体的な話を持っていくのは、あなた方の中で方向性が固まってからでいいですね？」
「有難うございます」
スウェンは重い荷を降ろしたような表情で、深々と頭を下げた。
「――っくしゅ！」
堅苦しい話の終わりを告げるように、アスタロトは小さくくしゃみして身体を震わせた。
「寒いのか？」
レオアリスが手を伸ばして額に当てる。
「風邪じゃないだろうな」
「――」
アスタロトの頬に、みるみる赤みが差した。
「ち、違うよっ」
「そうか？　顔赤いけど」
「お……」
お前が触るからだ、と言おうとして、アスタロトは慌てて飲み込んだ。
手が触れたくらいで狼狽えるなんておかしい。上手く言えないけれど。
「お腹が空いてるからじゃないかな！」

「はぁ？」
呆れた顔のレオアリスにくるりと背を向け、スウェンを身代わりにする。
「ご飯はまだですか？」
スウェンは館の管理人の顔になり、丁寧に頭を下げた。
「もう支度は整っております。食堂にご案内致しましょう。その後はぜひ、ここの温泉をゆっくりお楽しみください」

## 十四

「広〜い！」
アスタロトは今日何度目かの歓声を上げて浴場を見回した。
言葉通り広い。横幅十間ほどの長方形の浴場は二十人近くが一度に入れそうなほど広かった。
館と同じ瀟洒な造りで、半分以上が乳白色の湯を湛えた浴槽になっている。
敷き詰められた石はこの土地のものではなく、南方で切り出された薔薇石と呼ばれる大理石と、西のキュッセン地方特産の灰銀の筋の入った白の石英岩だ。
床は滑りにくく加工されているが、壁などは美しく磨き上げられている。浴槽を挟んで正面の壁はほぼ一面の硝子張り。
その硝子の向こうにもう一つ、露天風呂があった。
まずは屋内の浴槽に浸かり、熱い湯の中でぐっと身体を縮めた後、大きく息を吐いた。
「ふぁ〜、気持ちいい！　来て良かったぁ〜」
広々した温泉に肩まで浸かり、うんと伸びをする。
食事をして身体は充分暖まったと思っていたが、少し熱いお湯に浸かるとやはり冷えていたのだと判る。
満足気な溜息を洩らし、アスタロトは細い足を伸ばしてフレイザーへ顔を向けた。
「良かったー、フレイザーがいてくれて。一緒に入れるもんね。一人じゃつまらないから皆で一緒に入ろうかと思ってたけど、フレイザーと二人でゆっくりもいいよね」
フレイザーは一瞬だけ、アスタロトの言葉を受け入れ兼ねた。慎重に息を吐く。
「……アスタロト様――、私も、ご一緒できて本当に良かったですわ」
眩暈がする。

いや、軽い湯当たりだろうとフレイザーはこめかみをそっと押さえた。長く浸かっているとのぼせそうなくらい熱いから。
「普通のお風呂と違って感じるのは何でだろうね、何か不思議」
アスタロトは乳白色のお湯を両手で掬い、指の間から零した。独特の薫りが立つ。
「温泉って好きだな。色々問題は多いけどさ、やっぱり残って欲しいよね、ここじゃなくても。難しい話は判らないけど、こんな気持ちいいなら絶対人が来るようになるもん」
「私もそう思います。大丈夫、スランザール公が受けてくだされば、確実に上手く進んで行きますわ」
「レオアリスは口出しても大丈夫かな」
アスタロトは慎重に言った。
「相手がベールなら大丈夫だと思うけど……変な風に取られてもヤだよね。あの世界ってめんどくさいからなぁ」
心配そうな様子が微笑ましくて、フレイザーは安心させるように笑ってみせた。
「面には立ちませんし、今回は大公からの依頼があったようなものですし、ロットバルトもああ言っていましたから大丈夫ですよ」
「うん」
にっこり笑って、それからアスタロトは湯から立ち上がった。
「身体洗お」
そう言ったものの、アスタロトは身体を洗う様子もなく、洗い場の桶の前に座ってじっとしている。
フレイザーは自分も身体を洗おうと隣に座って、首を傾げた。
「アスタロト様？」
「うん、お願い」
はい、とアスタロトがフレイザーに向かって手を伸べる。
ほっそりと長い手足は女のフレイザーでも見惚れてしまう。
フレイザーは見惚れたまま、何を「お願い」なのだろうと暫らくじっと考え――、あっと小さく声を上げた。
「どうしたの？」
「い、いえ……お身体、洗いますね」
アスタロトはこう見えて、箱入りも箱入りの、公爵家のお姫様だ。
入浴時には何人もの侍従達が、丁寧に彼女の髪や身体を洗っていて、それが彼女にとって当然の日常なのだろう。
更に、自分で洗うという考え方は持っていないかもしれない。
「――いつもの入浴はきっと賑やかなんでしょうね」
おそるおそるそう聞くとアスタロトは朗らかに頷いた。
「うん、六人。楽しいよ、色々話とかして、つい長くなっちゃって叱られるけど」
（ああっ！　だ、だから皆で入ろうとか言うのね！）
くらり。
心底、本当に、付いてきて良かったと思う。
アスタロト一人だった場合、平気で男湯に飛び込みかねない。
（やっぱり洗ってって言うのかしら……ひー）
下手をしたらアーシアでさえ、それを止めないのではないか――。
想像するのさえ恐ろしい。というか、想像は控えさせて頂いた。
眩暈がする。
それにしても、先ほどのアスタロトの照れた様子にはフレイザーも思わず身を乗り出した位だが、こうして見ていると本人はまだほとんど自覚が無いらしい。
自覚したら多分、今のような発言はしなくなるはずだ。
（不謹慎だけど、ちょっと楽しみ……）
時間の問題だとは思う――思うが。
気になるのはレオアリスの方も同じで、剣士という種はそもそも恋愛感情が薄いのだと前にクライフが法術院のアルジマールから聞いたと言っていた事で、確かに先ほどのレオアリスの様子は余りに何気なさ過ぎ

た……
（……見逃せないわ～）
フレイザーは先行きにわくわくしながら、洗浄剤を泡立て、丁寧にアスタロトの身体を洗ってやった。

「いやー、これっすよ、これ！　やっぱいいっスわ～」
首の辺りまでざぶりと湯に浸かって、クライフは気持ち良さげに伸びをした。
「ロットバルトが入れないのが残念っすね～、こんな気持ちいいのに！　ていうかあいつ、怪我したのはわざとじゃないですか」
「……怪我してなくても入らない気もするけどな。部屋に設備あったし」
いわゆる大衆浴場に誰かと一緒に浸かっている映像が、全くと言っていいほど浮かばない相手だ。と言っても多分、ヴェルナーの屋敷はここと同じくらい広い浴室があるに違いないが。
「ちぇ、もったいねぇなぁ、こういう場所に来たら根掘り葉掘り色々聞き出すのが楽しいのに」
クライフは残念そうにそう言ったが、本心からというよりはこの場の雰囲気半分の発言だろう。
浸かったり出たりしながら延々恋愛話を繰り広げられる女性陣と違って、男同士で酒も入らず風呂場でそこまで盛り上がりたいとは思っていない。色気も何もない。
「混浴だったらなぁ」
とクライフはこっそり本音を洩らした。
せめて隣の声とか聞こえないかなぁ、と。こういう時のお約束じゃないか。
「何か言ったか？」
「いやいや！　あいつも怪我が早く治るといいっすね。いっそのことしばらくここに置いときますか、今日の明日じゃ飛竜乗るのは厳しいでしょ、十日くらいゆっくりしてもらって」
「さすがに十日は困るけど、せめて後一日か二日はじっとしててもらいたいな」
「いっそのこと一月ぐらいゆっくりして頂くと俺の気が楽なんですがね」
クライフの言葉にレオアリスは苦笑を浮かべた。
「グランスレイがいるから変わらないぜ、多分」
それからふと思い付いて黒森に視線を投げる。
「傷薬が欲しいな。明日はじいさんとこ顔出してくるか。うちならいい薬があるし」
村には近衛師団で用意している薬よりもっと効くものがある。それにここまで来たのだ久しぶりに顔が見たい。
今回は、思い出す事が多くて――。
「ここから村は近いんですか？」
アーシアが尋ねる。
「近いぜ、歩いたら多分今の時期三日はかかるけど、飛竜なら二刻くらいかな」
「ぜひそうしてください。副将も同じ事勧めますよ。どうせなら上将ももう一日こっち居て、王都には明後日帰ったらいいですよ」
クライフは気楽さを装いつつ、少し気掛かりな瞳でそっとレオアリスを見た。
雪獣と対峙した時、クライフは自分の親を想った。多分レオアリスも、彼の母親の事を思い出していた。
母という言葉は、レオアリスにとってどのような色彩を帯びているのだろう、と思う。
ただ口に出しては、別の事を言った。
「――ここの話、上手く行くといいですね。俺は政治とかそっちの話は今イチ良く判らないけど」
「そうだな。シュランの人達がどのやり方を選ぶにしても、俺達が関われる範囲は少ない。スランザールが関わったとしても、当然簡単な話じ

やないだろう」
「難しいすね、色々。誰かが一言言や済む話だったらいいんですが」
「……そういう話の方が少ないよ」
年齢とは少し相応しくない老成した物言いで、クライフはまたレオアリスを見た。
レオアリスは十七という年齢からは想像つかないほどずっと、様々な事を経験してきた。
理不尽な、納得の行かない事も。
ただ、それらの事がレオアリスの中に諦めや厭世感を生んでいるかと言えば、そうではない。
「だから俺達の範囲でできる事をやるしかないよな」
いつでも前に視線を向けているこの年若い上官を、クライフは敬愛している。
「そうですね、俺も――、力の限り応援します！　この温泉はホント気に入ったんで。できれば王都の近くに欲しいですけどね～。いっその事王都まで湯を引いちゃうってのはどうですか」
「惹かれるけどさすがにそこまでの規模は無理だろ。それにそれじゃこの辺りの振興にはならないし」
笑ったレオアリスにクライフはもう一度にやりと笑みを向け、それからまた肩まで湯に浸かった。
「すっかり雪が止みましたね。こうしてあったけぇ場所から眺める分にゃいい眺めですよ」
湯の表面から立ち上る湯気と、その揺らぐ向こうに広がる黒森の、静寂の中の光景。
夜空は雲一つなく澄んでいる。あんなに吹雪いていたのが嘘のようだ。
「明日は晴れそうですねぇ。いい景色が見れそうだな」
と言ってクライフは岩に寄りかかり、空を見上げた。

# 序

「ただいま～！」
アスタロトは明るい声と共に正規軍副将軍の執務室の扉を開けた。タウゼンは顔を上げ、素早く立ち上がる。
「公、お早うございます」
「温泉行って来たよ～、はい、おみやげ」
「土産、とは、また」
タウゼンはアスタロトの配慮への喜びと、どことなく複雑さを交えた表情で手渡された袋を見た。
アスタロトが黒森へ行ったのはタウゼンも当然承知している。
彼女が途中問題に巻き込まれた事も、昨夜の内に内政官房長官ベールからの書状で知らされていた。
と言ってもタウゼンが知った時は、既にアスタロト達が無事館にいた後だったが。
（大公も、もう少し早くお知らせ頂かなくては困る――）
近衛師団もだ。近衛師団は夕刻には知っていたようだが、正規軍には連絡が無かった。
しかし一番の問題は、アスタロト自身から何の連絡も無かった事だ。
確かにアスタロトは伝令使を持たないが、近衛師団に借りるなり、伝えさせるなりしてもらわなくては。
それに何より――
「有難うございます。――公」
タウゼンが厳（いかめ）しく礼を述べ、一言諫言をしようとアスタロトを呼んだが、アスタロトはまだ何やらごそごそと手に持った鞄を探っている。
「それは帰りにカレッサって街で買ったの。だから完全に黒森のおみやげって訳じゃないんだ。黒森におみやげ屋なんてないしね。でもそれじゃ悪いから、温泉で作った温泉卵あげる！　朝食に出たんだけど、美味

しかったよ～」
　はい、と真っ黒な卵を一つ差し出され、タウゼンは束の間何かを堪えるように瞼を伏せた。
「……有難く頂きます。――楽しく、過ごされたようで……」
「うん！　色々あったけどやっぱり楽しかったよ。レオアリスも最初は文句言ってたけど、楽しかったに決まってるし」
　ただ少し残念だったのは、帰りが一緒じゃ無かった事だ。
「公」
「帰りはさぁ、あいつ、お祖父さん達のとこ顔出してくるとか言って、私はフレイザー達と先に帰ってきたんだけど」
　タウゼンがじっと見ているのに気付いて、アスタロトは浮かれ過ぎだったような気がしてきた。
「べ、別に一緒に帰らなくてもいいんだけどね」
　余計な事を言い過ぎただろうか。
「とにかく、すごく良かったから、タウゼンも今度行って来なよ」
　アスタロトは誤魔化すように早口で言った。
「いい保養になるよ。あ、でも、これからしばらくは難しいかも。ちょっとだけ問題があってね、多分しばらく宿を閉じるんじゃないかな」
「公」
　何度目か――、タウゼンは無視できない響きでアスタロトを呼んだ。
「……どうしたの？」
「そのお話ですが」
　普段とは違うタウゼンの様子にアスタロトが首を傾げる。
　視線の前でタウゼンは姿勢を正し、はっきりと告げた。
「今回のような事は、あまりなさいませぬよう」
「？　何で？　いない間に何かあった？」
「我々の事ではなく、貴方が置かれた状況が問題なのです」
　タウゼンの表情は厳しい。アスタロトは持っていた鞄を卓の上に置き、改まって彼女の副将軍を見上げた。
「私？　全然平気だったよ。それはかなり寒かったけど、怪我は無いし。ロットバルトが怪我しちゃって、あいつはには悪い事したなって思うんだけど」
「貴方はまずは事態について、せめて我々にご一報くださるべきでした」
　決して感情的ではないが、厳しい響きがあった。タウゼンの言いたい事はアスタロトにも良く判った。
「――そうか、ごめんなさい。心配かけたよね」
　素直に頭を下げる。仕事ではなかったとは言え、正規軍はアスタロトの身内のようなものだ。連絡をしなかったというのは確かに良くなかった。
が、ついついまた余計な事を言ってしまった。
「でも、ほら、レオアリス達もいたし」
　タウゼンはしばらく言葉を選んで躊躇していたが、一つ呼吸を置いて口を開いた。
「恐れながら――僭越な事を申し上げますが、今回のような事は余り好ましい事ではございません」
「――今回のようなって、遊びに行く事？　問題があったから？」
「いえ」
　タウゼンの意図はそこには無い。
「突然行くのがダメ？」
　それにも、タウゼンは答えなかった。
「――じゃあ、何。はっきり言ってくれなきゃ判んないよ」
　少し苛立って尖った声になったアスタロトに対し、あくまで礼節を保ったまま、タウゼンはそれを告げた。
「近衛師団――いえ、第一大隊大将殿には、余り御執心なさいませんよう」
「――」
　何を言っているのか良く判らない。
　瞳を見開き、暫く言葉も無くアスタロトはタウゼンを見つめていたが、

やがて言葉が染み込むにつれ、その深紅の瞳に激しい炎を躍らせ、睨み付けた。
「出過ぎた事を言うな。あいつは王に剣を捧げた剣士だ」
「――」
タウゼンは非礼を詫びるように深く頭を下げたが、それ以上何も言わない。
タウゼンの沈黙を、アスタロトはレオアリスの過去故だと、そう受け取った。
「お前は、まだ過去に捉われているのか。過去に起こった事が何かあいつの罪になるのか？　もう、全て――、失っているのに。これ以上、何の証明が必要だ」
震えるような憤りを覚えたが、タウゼンは静かに顔を振った。
「いえ。王は、今後彼を重用されるでしょう。おそらくは、アヴァロン閣下の」
タウゼンはそこで口を閉ざしたが、それはまだ軽々しく口にする類の事ではないからで、言葉はこの先の確たる未来を語るように響いた。だからアスタロトは戸惑った。
「そうだ、当然――」
今は口には出せないもののアスタロトも、いずれレオアリスがアヴァロンの後を継ぐだろうと想定している。
そしてタウゼンもまた同じ考えを持っていると、アスタロトにも判った。
それなのに何がいけないのか。
今更何故タウゼンがこんな事を言いだすのか、そこがアスタロトには判らない。
「……まだ他に何か問題を作りたいのか」
「公、私の口から詳しく申し上げるのは控えさせていただきます。しかし、貴方には正規軍将軍としてのお立場と責務がある事をお忘れなきよう」
「立場と、責務？」
「左様です」
アスタロトには判らない。判りたくもない。
それらを負う事は納得できても、そんなものに縛られるのが、一番嫌いだから。
そんなものでアスタロトの一番大事な友人を否定されるのは我慢できない。
「ぜひ、ご熟考を」
タウゼンも言葉が足りなかった。立場を考慮した結果だが、せめて理由を明らかにして諭す必要があっただろう。
気が付かないままに想いが募れば、その分傷付くのはアスタロトだ。
「――余計な世話だ」
アスタロトは苛立ちを隠さずそう告げると、踵を返して部屋を出、扉を閉ざした。

20100321 校了